

# 笹沼源之助・谷崎潤一郎交流年譜

細江 光

(前書き)

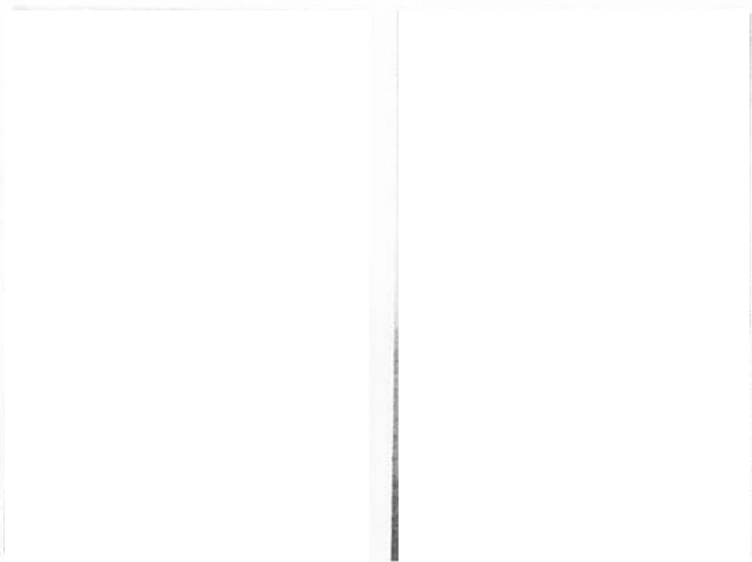
笹沼源之助と谷崎潤一郎との交友は、小学校で同級になった明治26年から、源之助が亡くなる昭和35年まで、67年の長きにわたる。

笹沼源之助が、若き日の谷崎に対して行った経済的な支援など、谷崎にとっての笹沼家の重要性は、これまでも認識されていたが、両者の交友の具体的な細部となると、必ずしも良くは分かっていたいなかった。

そこで、今回、私は、笹沼源之助の長男・宗一郎氏の夫人である千代子さんの全面的な御協力を得、千代子さんが長年にわたって付けて来られた膨大な日記の中から、谷崎関係の記事を

丹念に探し出して頂き、それらを中心として、この年譜を作製した。また、挿入した六点の写真も、すべて千代子さんから御提供いただいたものである。ここに記して、笹沼千代子さんの多大な御盡力への感謝の意を表したい。

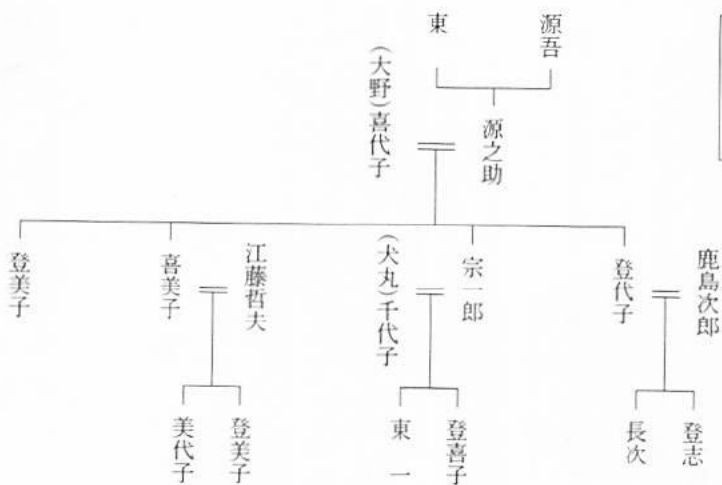
この年譜が、笹沼源之助及びその家族の顕彰ともなり、また、エゴイストと見られがちな谷崎潤一郎の、友達思いな、温かい人間性の一面を証するものとなることを希望するが、紙数の都合で、文章は簡略を旨とし、省略した事実も多い。特に、千代子さんが潤一郎に出会う昭和十七年より以前のことは、要点のみにとどめざるを得なかった。また、笹沼源吾さん・東さんについては、笹沼千代子さんに御願いして、戸籍謄本を調査して頂いたが、関東大震災または空襲によって失われていることが判り、借楽園開業以前のことには、殆ど調べられなかった。



(写真2) 笹沼 東

(写真1) 笹沼源吾

笹沼家系図



◆天保十五・弘化元年◆(1844)

笹沼源吾誕生(永見寺墓石から推定)。栃木県出身  
〔季刊日本橋〕所載笹沼源之助「借楽園」。なお「季刊日本橋」は三康図書館所蔵のものに拠った。以下同様)

◆嘉永三年◆(1850)

後の笹沼東誕生(永見寺墓石から推定)。栃木県出身  
〔季刊日本橋〕所載笹沼源之助「借楽園」

◆明治十六年◆(1883)

借楽園について、「開花新聞」に、《日本橋区亀島町19番地に計画中。資本金3万円。料理は一人前上等二十五円から下等五十銭まで。》という記事が出る。

◆明治十七年◆(1884)

日本橋区亀島町1丁目29番地に借楽園開業。亀島町にしたのは、三井物産や第一銀行が茅場町にあり、足便が良かったためであろう。土地は三井の番頭向井氏の所有。支那大使黎庶昌氏の肝煎りで支那人の料理人を廻して貰った。当初は北京料理。會員制で、経営は困難だった(「季刊日本橋」所載笹沼源之助「借楽園」)。

8頃

笹沼源吾・東が柳谷謙太郎に誘われ、借楽園のマネージャーになる。源吾は、色んな事業に失敗した揚句、浪人していた時だった(「季刊日本橋」所載笹沼源之助「借楽園」)。

※潤一郎の『幼少時代』記載笹沼源之助の言葉によれば、借楽園は、明治16年、陽其二(元長崎通辞)

・柳谷謙太郎・下村某(日本橋菓子舗「翁堂」主人)ら長崎出身者が発起人となり、渋沢栄一・大倉喜八郎・浅野総一郎らが株主となって、最初は會員組織で発足、笹沼源吾が支配人となったが、翌年、笹沼源吾が借楽園を譲り受け、園主となり、一般向け料理店として営業するようになった。

※笹沼源之助の「谷崎と借楽園」(日本現代文学全集 月報1号 昭和35・10)によれば、借楽園の所在地は、もと御殿医・戸塚玄海の三百坪程の屋敷跡。渋沢栄一・浅野らと駐日清国公使黎さん・長崎県人の何さんらが集まって、日中友好を暖めるという名目で倶楽部組織の支那料理屋を作った。しかし、たちまち経営に行き詰まり、倶楽部の幹事だった柳谷との縁故から、笹沼源吾が明治19年に経営を引き受

けた。

◆明治十八年◆(1885)

8・8 笹沼源吾(42)・東(36)の間に子供が産まれるも、

この日、早世。戒名は露露孩児(永見寺墓石による)。

◆明治十九年◆(1886) 潤一郎1歳

この年から、借楽園は笹沼源吾の個人経営となる

(『季刊日本橋』所載笹沼源之助「借楽園」)。

7・24 谷崎倉五郎・関の長男として、潤一郎誕生。

◆明治二十年◆(1887) 潤一郎2歳

8・31 笹沼源吾(44)・東(38)の一人息子として、源之

助誕生。

※東京都中央区役所の「改製原戸籍」(昭和33・35年改製以前の戸籍)によれば、母の名はトウ。当初の本籍地は、本所区向島中之郷町31番地となっている。源吾は借楽園開業以前、ここに住んでいたの

であろう。ただし、源之助は借楽園で生まれ育ったと

推定される。「改製原戸籍」によれば、大正2年11

月28日に、東京市日本橋区亀島町1丁目29番地に転籍。昭和4年3月23日、土地区画整理により、亀島町1丁目50番地に変更。昭和8年8月1日、土地名

称及地番変更につき、茅場町2丁目8番地3に更正となっている。

◆明治二十四年◆(1891) 潤一郎6歳

秋、谷崎家は日本橋区南茅場町45番地に転居。潤一郎は、そこから靈巖橋を渡った菟蓐島の私立小岸小学校付属幼稚園(京橋区靈巖島浜町18番地)に通った。笹沼源之助も同じ時に通っていたが、この時は知り合う事はなかった。(『幼少時代』)

◆明治二十六年◆(1893) 潤一郎8歳

潤一郎は、前年秋より通学していた坂本尋常小学校を落第。1年生をやり直したため、笹沼源之助と同級になる。

9・3

後の笹沼源之助夫人となる喜代子誕生。

※「改製原戸籍」に拠れば、父・大野利右衛門(神田橋本町2丁目13番地)、母・千代の七女。本人の名前は清子となっている。

※喜代子は、神田の有名な質屋・大野利右衛門の末娘(『撫山翁しのぶ草』杉浦貞二「ゲンちゃんをしのんで」)。大野は、外神田橋本町の親質屋(潤一郎『撫山翁しのぶ草』の巻尾に)。

◆明治二十七年◆(1894) 潤一郎9歳

※日清戦争中の或る日、潤一郎は、黒田先生に、笹沼源之助の絹の羽織と自分の木綿の羽織を比べられた事を切っ掛けに、笹沼源之助と親しくなり、始終、遊びに行くようになった(潤一郎『幼少時代』)。

※潤一郎は、後年、笹沼源吾さんの「源公いまずか」という野州訛りの声色を、笹沼千代子さんによくやっけて見せた。源吾さんは怖かったと潤一郎は言っていた(1998/9/3 笹沼千代子さんと電話)。

◆明治三十三年◆(1900) 潤一郎15歳

笹沼源之助は高等科3年を終えて、府立尋常中学校の築地分校(後の府立第三中学校)に入學した。

※笹沼源之助のことを、小学校時代は源ちゃんと呼んでいた。プウさんという綽名は、三中時代から、谷崎が付けたのではない(潤一郎『幼少時代』『撫山翁しのお草』の巻尾に)。

※潤一郎は最後まで源之助をプウさんと呼び続けた。しかし源之助は、少年時代には「潤ちゃん」と呼んでいたが、後には「谷崎」と呼び捨てにしていた(1998/10/8 笹沼千代子さん私信)。

※ただし笹沼源之助の「神童谷崎」(新書版谷崎潤一郎全集第5巻月報第17号昭和33・11中央公論社)

には、「小学校時代から谷崎と「源ちゃん」「潤ちゃん」と呼び合う間柄にある」と書かれている。2人だけの時は、そう呼び合っていたか?

※笹沼源之助の府立三中での同級生に萩原英一がいた。のち、東京音楽学校卒、母校のピアノ科主任教授。笹沼源之助とは生涯の親友となった(『撫山翁しのお草』笹沼宗一郎「序にかへて」)。

※萩原英一は、潤一郎・大塚常吉・犬丸徹三とも共通の友人。東京のロータリアン。萩原英一の次女と千代子は雙葉幼稚園から同級。宗一郎はピアノを萩原英一に習った。千代子の母は、お茶の本女学校で、萩原英一に習った。(1996/8/17 笹沼千代子さん私信)。

※「少年」の萩原の柴ちゃんに名前を使われた人物である(潤一郎『創作余談』)。

◆明治三十四年◆(1901) 潤一郎16歳

潤一郎は坂本小学校を卒業する。この時(？)、潤一郎らの組が中心になって、生徒たちが話し合っ

稲葉先生を中心とする「修徳会」という会を作った。稲葉先生を交えて倫理問題について激しい議論をし、一部有志が回覧雑誌を発行したという（石渡荘太郎伝記編纂会編纂・発行『石渡荘太郎』S 29 / 11 非売品）。

※『撫山翁しのお草』杉浦貞二「ゲンチャンをしのいで」によれば、卒業に際して、17人くらいで「かもめ会」という同級生会を結成した。潤一郎・笹沼源之助・杉浦貞二・峯岸鎮治らがメンバーだった。修学旅行で箱根底倉の旅館梅屋に特別参加の笹沼源之助と泊る（潤一郎『撫山翁しのお草』の巻尾に）。

4 ◆明治三十八年◆（1905）潤一郎20歳

3 潤一郎は、東京府立第一中学校を卒業する。  
3 笹沼源之助は三中を卒業。答辞を読んだ（『撫山翁しのお草』吉野錦三「想ひ出の一節」）。

9 潤一郎は第一高等学校一部英法科に入学する。

※笹沼源之助は、蔵前の高等工業を受験するも失敗。1年浪人する。

◆明治三十九年◆（1906）潤一郎21歳

9 一 『撫山翁しのお草』富山保「私の見た笹沼さん」高

橋孝作「畏友故笹沼学兄を偲ぶ」によると、笹沼源之助は蔵前の高等工業電気工学科に進学した。

※『痴人の愛』河合譲治の学歴のモデル。栃木県出身としたのも、笹沼家が野州出身であることと関係がある。また、『ハツサン・カンの妖術』のインドラマティラム・ミスラの学歴のモデルでもある。

※笹沼源之助の高等工業在学中に、オーストリア人シャッツマイヤーを向島の家に招いて、潤一郎と一緒にドイツ語の個人教授を受けた（『撫山翁しのお草』笹沼宗一郎「序にかへて」）。

※これが『独探』のモデルであろう。なお、芥川龍之介の未定稿『Karl Schatzmeyerと自分』の Karl Schatzmeyer も同一人物であろう。

◆明治四十年◆（1907）潤一郎22歳

3・17 笹沼源吾死去。享年64歳。戒名は浄徳院源昌悟道居士（永見寺墓石による）。笹沼源之助は、高等工業

在学の儘、借業園主人となる。

潤一郎は、家庭教師として住み込んでいた北村家を追われる。

6

※『現代小説全集谷崎潤一郎集著者年譜』では、伯父・久兵衛と笹沼源之助の経済的援助を受けたとある。

◆明治四十一年◆(1908) 潤一郎23歳

9 潤一郎は東京帝国大学国文科に入学。

※大学時代、笹沼源之助に授業料の使い込みや、悪い遊びの尻ぬぐいをして貰った(潤一郎『釈明』)。

※大学入学後、笹沼源之助に連れられて、始終柳橋で遊ぶようになる(潤一郎『青春物語』)。

※『前科者』『AとBの話』など、金持ちの友人から金をせびり取る悪しき天才芸術家の物語は、笹沼源之助との関係にヒントを得たフィクションであろう。

※この頃、柳橋深川亭で笹沼源之助から高木定五郎を紹介され、友達になる。高木定五郎は、小山内薫

のバトロンドで『大川端』にも出る深川木場の材木屋敷井市助の従弟で、蔵前高等工業建築科卒の建築技師・材木商、愛称・定ちゃん(潤一郎『高血圧症の

思ひ出』)。

◆明治四十二年◆(1909) 潤一郎24歳

2 1 (から春まで) 潤一郎は激しい神経衰弱に罹り、茨

城泉助川町会瀬入舟の借案園別荘に転地療養する(潤一郎『青春物語』)。

※ここで、花岡芳夫(後、大阪府立貿易館長)や大塚常吉らと知合う(浜本浩『大谷崎の生立記』)。

※大塚常吉は、笹沼源之助と中学で同期。高等商業へ進学し、犬丸徹三と同期。卒業後、2人とも満鉄

の大和ホテルで働き、帝国ホテルが出来た時、犬丸が支配人、大塚が副支配人になった。大塚は、戦争

中は上海のキャセイホテルに居て、後、京都ホテル常務取締役になった(稲沢秀夫『秘本谷崎潤一郎』

1-181, 3-118-9)。

笹沼源之助は蔵前の高等工業電気工学科を卒業した(『撫山翁しのお草』奥山八郎「仁徳院撫山源翁居士を憶ふ」)。

笹沼源之助のヨットで、源之助・大塚常吉と3人で品川沖まで出掛けた帰り、曳舟川の源森橋の所で荷船に追突して、危ない目に合う(潤一郎『撫山翁

しのお草』の巻尾に)。

※『撫山翁しのお草』グラビアにヨット事件の時の服装で撮った笹沼源之助の写真がある。

笹沼源之助(23)、喜代子(17)と結婚(『撫山翁しのお草』)。

※笹沼源之助の「谷崎と借楽園」(日本現代文学全集 月報1号 昭和35・10)によれば、潤一郎はこの時、神田にある喜代子の実家の窓から、そっと喜代子を見て来てくれたと言う。

※「改製原戸籍」に拠れば、婚姻届出は明治42年12月15日。

※新婚旅行には、母堂同伴で、大阪・奈良・京都・近江八景などを巡遊した。その費用は、総額三千数百円(『撫山翁しのお草』高橋孝作「畏友故笹沼字兄を偲ぶ」)。

※「僕を生んでくれたのは親である。僕を今日まで生かしてくれたのは彼等(笹沼夫妻)である」と潤一郎は大正2年10月23日付け精二宛書簡で述べている。

※明治40年代から、笹沼源之助は写真と映画撮影に凝っていた(『撫山翁しのお草』笹沼宗一郎「序にかへて」)。

※これは『肉塊』の主人公の造型に利用されている

一部分があろう。

◆明治四十三年◆(1910)潤一郎25歳

第二次「新思潮」創刊。

※潤一郎は頭が古く、忘ける者の道楽者という評判で、同人たちは馬鹿にしていたが、谷崎を加えれば借楽園が金を出すだろうという事で、仲間に加えたのだと言う(潤一郎「青春物語」)。結局、笹沼は二、三百円ほど出した(笹沼源之助「わが友谷崎を語る」昭和文学全集 月報15号 昭和28・6)。

第二次「新思潮」に潤一郎の『麒麟』掲載。

※この頃の作品には、向島の借楽園別荘で書いたものが多い。

◆明治四十四年◆(1911)潤一郎26歳

「スバル」に潤一郎の『少年』掲載。

※向島の借楽園別荘で書いたもの。お稲荷さんのお祭りは、借楽園別荘の祭がモデル。用心駕籠遊びなど、借楽園の物置部屋でした幼少時代の遊びも利用している。

笹沼東夫人死去。享年62歳。戒名は寿徳院東室素光大姉(永見寺墓石による)。

6・9



笹沼夫妻に長女・(鹿島)登代子誕生。

「スバル」に潤一郎の『栞問』掲載。三平の着物は偕楽園夫人の入れ知恵だった(潤一郎『青春物語』)。

初山書店から橋口五葉の胡蝶本で、潤一郎の第一短編集『刺青』刊行。

※笹沼源之助の「谷崎と偕楽園」(日本現代文学全集 月報1号 昭和35・10)によれば、潤一郎は『刺青』の扉に『笹沼東刀自に贈る』と献辞を入れると言っていたが、印刷所の手違いからか、この文字が入らなかった。そこで潤一郎は笹沼に謝りに行き、「せめてお墓に供えたい」と申し出たので、2人は一緒に浅草の永見寺に出掛け、墓前に献じて来たと言う。

◆明治四十五年(大正元年) ◆(1912) 潤一郎27歳

柳橋柳光亭で行われた津島寿一・君島一郎らの卒業前祝の会に潤一郎出席。

※この時、東大御殿山でとった記念写真がある。下の座敷に来ていた笹沼源之助・長野草風に津島寿一を引合わせた(『撫山翁しのぶ草』津島寿一「笹沼君との初対面・鳥料理など」)。

※潤一郎は六代目に似ているのが自慢だったが、君島一郎も六代目に似ていると称していた。すると潤一郎は、「あれは野州の六代目だ」などと悪口を言

った(1996/7/24 笹沼千代子さん直話)。

◆大正二年 ◆(1913) 潤一郎28歳

※この年偕楽園を改築した(『季刊日本橋』所載 笹沼源之助「偕楽園」)

笹沼夫妻に長男・宗一郎誕生。

一匡社の同人雑誌「社会及国家」創刊。潤一郎の一高英法科時代の友人たちが中心になって作った法律・経済・政治問題を扱う雑誌で、昭和16年4月、297号まで続く。笹沼源之助も社員となった。潤一郎は社員にはならず、社友(半年以上の継続購読者)として、何回か寄稿した。

◆大正三年 ◆(1914) 潤一郎29歳

「中央公論」に潤一郎作『喜劇 春の海辺』掲載。

※佐藤春夫『この三つもの』(七)によれば、笹沼夫人は、少々、潤一郎に惚れていて、噂が立った事もあると云う。その事を素材にしたものか?

「中央公論」に潤一郎の『饒太郎』掲載。

※饒太郎が借りて住んでいる別荘のモデルは、向島の笹沼別荘であろう。

『東京朝日新聞』に潤一郎の『金色の死―或る富豪の話―』連載。

※主人公・岡村君のモデルは、笹沼源之助であろう。

『撫山翁しのお草』吉野錦三「想ひ出の一節」によれば、笹沼源之助は、太っていたが、逆立ちや鉄棒の大車輪・逆車輪・宙返りなどが得意だった。

※笹沼源之助の高等工業での親友に岡村武雄という人が居た（『撫山翁しのお草』笹沼宗一郎「序にかへて」）。主人公・岡村君の名前は、ここから取ったか？

◆大正四年◆（1915）潤一郎30歳

潤一郎は、笹沼夫妻の媒酌により、石川千代（20）と結婚。

※結婚の費用や月々の生計の不足分を補ってくれたのは笹沼源之助だった（潤一郎『釈明』）。

※笹沼喜代子は、千代子とお揃いの着物や帯を作って、潤一郎の妻は自分の妹と同じだと言っていた（佐藤春夫『この三つもの』七）。

11

◆大正五年◆（1916）潤一郎31歳

※潤一郎が笹沼家に来る時には、松子は連れて来なかった。笹沼家では松子を嫌っていて、佐藤千代子を鼻屑にしていた（1996/7/24笹沼千代子さん直話）。

※これは、喜代子の千代子に対する感情から来るものであろう。

潤一郎『独探』（『新小説』）に浅川の名で、笹沼源之助登場。

9・19 一 笹沼夫妻に次女・（江藤）喜美子誕生。

◆大正七年◆（1918）潤一郎33歳

12

中国旅行から帰国した潤一郎は、東京駅頭で笹沼源之助がスペイン風邪で肺炎になり、危機は脱したが、まだ臥床中だと聞いた。しかし、笹沼は死の恐怖を感じることが一度もなかった。それは生来の善人だからだと潤一郎は考えた（潤一郎『撫山翁しのお草』の巻尾に）。

◆大正八年◆（1919）潤一郎34歳

8・13 塩原温泉門前宮本誠方より中根駒十郎宛潤一郎書簡

41A。

※宮本家は塩原温泉妙雲寺前にあった(市居義彬『谷崎潤一郎和歌集』)。塩原温泉塩釜にあった笹沼家別荘と近かった。

※潤一郎は宮本の2階を一時借りて執筆していた。千代・鮎子も時々来た。大正8年夏には、笹沼一家は1ヶ月ぐらい、料理人・女中も代わる代わる塩原に避暑に行っていた。食事は笹沼別荘でしたと考えられる(1997/2/3笹沼千代子さん私信)。

※今東光の『毒舌文壇史』によれば、大正11年6月、潤一郎が自作の戯曲『お国と五平』の舞台監督をした時、芝居の背景になる奥州街道の松並木について、それが黒松か赤松かが問題になった際、潤一郎は、塩原に笹沼源之助の別荘があつてよく行くから、たしか赤松だと記憶していたという話が出ている。

◆大正九年◆(1920) 潤一郎35歳

3・14頃、借楽園で、潤一郎の妹・伊勢と中西周輔の結婚式を執り行う。この際、笹沼家からも祝の品を買ったようである。(『彷彿月刊』1992・9青木正美「作家の手紙」(4)〈10・20借楽園から佐藤春夫に宛てた潤一郎書簡(中

央公論』H5/4ただし、11月17日とも) \*小田原事件関係

※潤一郎は佐藤春夫を借楽園に連れて行き、千代子およびせい子との関係について長い告白をした(佐藤春夫『この三つのもの』)

◆大正十年◆(1921) 潤一郎36歳

※笹沼源之助、中国旅行。麻雀を買ってくる(『撫山翁しのぶ草』笹沼宗一郎「序にかへて」)。上海を始め、中国各地を遊歴。朝鮮の京城も訪れた(『撫山翁しのぶ草』円地亨四松「笹沼さんの江戸児気質」)。※この年から大正13年にかけて、笹沼源之助は人絹製造事業を計画したが、実現せず。しかし、笹沼源之助はこの経験を生かして、後年、ライファン工業を大成した(『撫山翁しのぶ草』西村直「無題」富山保「私に見た笹沼さん」)。

◆大正十一年◆(1922) 潤一郎37歳

3・13 笹沼夫妻に三女・登美子誕生(『改製原戸籍』)。

◆大正十二年◆(1923) 潤一郎38歳

4 笹沼夫妻、中国旅行(『撫山翁しのぶ草』グラビア・笹沼宗一郎「序にかへて」)。

※『撫山翁しのお草』古市勉「笹沼君の思いで」によれば、山村耕花・長野草風も同行。

関東大震災。借楽園は焼失。潤一郎は、以後、関西に住む。

小石川で借楽園再開のため、笹沼源之助は上海に諸道具を買いに行く(『撫山翁しのお草』古市勉「笹沼君の思いで」)。

※上海では、土屋計左右の世話になったと言う(1996/7/24笹沼千代子さん直話)。

◆大正十三年 ◆(1924) 潤一郎39歳

※この年、小石川伝通院脇の借家で借楽園営業再開(『撫山翁しのお草』中根一二三「思い出三十九回」1996/7/24笹沼千代子さん直話)。

※第九回「新潮」合評会が1月15日に小石川の借楽園で行われている事から、借楽園が一月から営業していた事が判る。

※小石川伝通院の側の有名な方位見・尾島某の家を借りて仮営業していた(『季刊日本橋』所載笹沼源之助「借楽園」)。

※笹沼源之助は、茅場町に借楽園再建のため、大工

◆大正十五年(昭和元年) ◆(1926) 潤一郎41歳

1人を伴って、中国の有名建築物の研究に行く(『撫山翁しのお草』古市勉「笹沼君の思いで」)。  
帝国ホテル支配人・犬丸徹三・治子夫妻に長女・千代子誕生(後の笹沼宗一郎夫人)。麹町で育ち、後に田園調布に移る。机と椅子で育ったため、畳に座ることが苦手だった。帝国ホテルで西洋料理を練習した(1996/7/24笹沼千代子さん直話)。  
笹沼源之助の三女・登美子死去。戒名は天真美浄善童女(永見寺墓石による)。

潤一郎、上海旅行。

※月日不明、潤一郎と笹沼源之助が、上海の西洋料理店カフェー・カルトンへ、古市勉の案内で行った(『撫山翁しのお草』古市勉「笹沼君の思いで」)。

※潤一郎の『上海見聞録』でも、カルトン・カフェーに言及。

※この時か? 笹沼源之助は上海の呉頭石(呉昌碩の誤り)・王一亭などの使っていた料理番を連れ帰り、素菜料理、即ち中国の精進料理を採り入れた(『季刊日本橋』所載笹沼源之助「借楽園」)。

9・10? 潤一郎は上京して小石川のSの家(笹沼源之助の偕楽園)に泊る。小田中タミから電話を貰い、佐藤春夫の留守中に訪問、八日夜付けの佐藤春夫の手紙を読む。(佐藤春夫『去年の雪、いまいずこ』) 9・11?、佐藤春夫を再び訪ね、和解する。(佐藤春夫『去年の雪、いまいずこ』)

◆昭和二年(1927) 潤一郎42歳

潤一郎は芥川龍之介葬儀に参列す。帰途、泉鏡花・里見弴・水上瀧太郎・久保田万太郎と偕楽園で懐旧談(『懐古録』)

※嶋中駒二との対談「芥川龍之介について」(S 29年7月24日NHKラジオ第一放送)によれば、偕楽園が小石川の伝通院にあった時で、偕楽園の主人が、皆でうちへご飯食べに来ないかというような事で、みんな行った。里見の小説によく出て来る太鼓持ちの人が途中から参加した。

◆昭和三年(1928) 潤一郎43歳

※月日不明、偕楽園はこの年、元の場所に再建された。第57回「新潮」合評会が、三月六日に小石川の偕楽園で行われている所から、それ以降に移転した

事が判る。

※笹沼源之助は、震災後、10数ヶ月間で30枚以上の図面を書き上げ、自ら設計・デザインし、建築に掛かってからは3年間、毎日、茅場町の普請場で監督した(『樵山翁しのお草』笹沼宗一郎「序にかへて」)。

※笹沼源之助は、予め大工の棟梁を建築専門の夜間学校に入学させて、充分基礎教育をしてから、建築に取りかからせたと言う(『樵山翁しのお草』大森作三「前社長への或る思い出し」)。

※向島の笹沼別邸には茶室があり、昭和初期までは、週末に笹沼夫妻も人力車で通ったと言う(1996/7/24 笹沼千代子さん直話)。

好文園2号から中根駒十郎宛潤一郎書簡93A。(梅ノ谷の家)目下ぼつぼつ建築にかかっている。

※兵庫県武庫郡本山村梅ノ谷<sup>1053</sup>、56番地の農家井上とみ方を買取り、ふるい平屋建ての母屋に、東京から偕楽園出入りの大工に泊り込みで来て貰い、自ら設計した日本と支那と西洋の台の子のような別棟を増築した。広い板敷の客間には炉が切られていた(松子『倚松庵の夢』「源氏余香」)。

## ◆昭和五年◆(1930) 潤一郎45歳

改造社版『谷崎潤一郎全集』第11巻月報第1号に笹沼源之助の「谷崎君の少年時代」掲載。

当事者の話し合いの末、千代子が潤一郎と離婚し、佐藤春夫と再婚することを決める。

※この時、千代子と鮎子はすぐには佐藤春夫の家にいかず、借楽園で一時期匿っていた事がある(1996/7/24笹沼千代子さん直話)。

谷崎潤一郎は北陸を経て上京し、兼ねてから意中にあった借楽園女中との結婚を申込むが、つい先だっ

※『陰翳礼讃』によれば、日本座敷に調和する電燈器具を求めて、石油ランプ・有明行燈・枕行燈を古道具屋から採りて来て、それへ電球を取り付けた(『夢喰ふ虫』の美佐子の父の家でも使っている)。  
 ※『撫山翁しのお草』高橋孝作「畏友故笹沼字兄を偲ぶ」によれば、関東大震災後、借楽園再建に際して、笹沼源之助が和室用に行燈式照明器具を考案したのが、この種照明の嚆矢。  
 ※『陰翳礼讃』に与えた笹沼源之助の影響は、無視できないだろう。

## ◆昭和八年◆(1933) 潤一郎48歳

媒酌人・岡成志及び妹尾夫妻立合いの上、丁未子夫人との事実上の協議離婚成立し、証書を取交わす。丁未子が結婚するか、生計を立てられる職につくまで、毎月150円づつ仕送りをする(昭和9年5月6日笹沼源之助宛潤一郎書簡14)。

※丁未子は離婚後もしゅちゅう笹沼家へ来ていた(1996/4/19笹沼千代子さん直話)。

借楽園で笹沼夫妻の銀婚式(『撫山翁しのお草』)。

※潤一郎は、菅桶彦に描いて貰った菊花之図に「つゆしみにいろをきたへてちよ八千代根さしをかはす黄菊白菊」の歌と「ことし昭和八年十一月二十九日

## ◆昭和六年◆(1931) 潤一郎46歳

潤一郎は東洋軒ホテルから古川丁未子に借楽園に来るように連絡。夕食を共にし、求婚する(古川丁未子「われ朗らかに世に生きん」)。

午後4時、岡本の谷崎邸で、潤一郎は岡成志夫妻の媒酌で古川丁未子と結婚式を挙げる。

笹沼君夫妻銀婚式の賀筵を開く乃ち楠彦画伯に囑して菊花之図を得自ら腰折一首を賛して心はかりの祝意を表すと云尔 撰陽漁夫 潤一郎書」という言葉を書いて贈る。昭和9年5月6日付け笹沼夫妻宛潤一郎書簡に箱書の事が出る。

◆昭和九年◆(1934) 潤一郎49歳

5・6 笹沼夫妻宛潤一郎書簡146。松子は森田姓のまま、『春琴抄』の佐助の如くにして生涯を送りたい。

6・30 鶴見上山草人宅から松子宛潤一郎書簡。塩原温泉塩釜笹沼別荘で『夏菊』執筆(松子『湘竹居追想』)。

◆昭和十年◆(1935) 潤一郎50歳

1・28 潤一郎は森田松子と打出の自宅で弁護士木場悦熊・貞子夫妻の媒酌により、結婚式を挙げた。

10・29 「季刊日本橋」第3号に笹沼源之助の「日本橋名舖鑑 倍楽園」掲載。

◆昭和十一年◆(1936) 潤一郎51歳

5・1 笹沼源之助の長女・登代子が、鹿島次郎(のち早稲田大学教授・工学博士)と結婚する。

5・7 修善寺温泉で急性盲腸炎になり、入院手術をした倍楽園花嫁(鹿島登代子)を潤一郎が病院に見舞う(6

6・24

日松子宛潤一郎書簡)。

夜潤一郎は出発、月末まで東京に滞在(22日雨宮庸蔵宛潤一郎書簡)。倍楽園披露のため(2日雨宮庸蔵宛潤一郎書簡)。

※登代子と鹿島次郎との結婚披露宴に列席した(1996/8/7笹沼千代子さん私信)。

打出より佐藤春夫方鮎子宛潤一郎葉書161。また塩原(※笹沼別荘)にでも行って、『源氏物語』現代語訳をミッチリ遣ろうと思う。

◆昭和十二年◆(1937) 潤一郎52歳

12・13 笹沼源之助は、鹿島次郎とライファン工場の相談をし、氷糞製造を目指す事になる(『撫山翁しのお草』

12末 鹿島次郎「向島のライファン」。

向島小梅町の倍楽園別荘跡地にライファンの中間試験工場建設開始(『撫山翁しのお草』鹿島次郎「向島のライファン」)。

◆昭和十三年◆(1938) 潤一郎53歳

2 向島小梅町の倍楽園別荘跡地にライファンの小規模な工場建設開始(『撫山翁しのお草』鹿島次郎「向島のライファン」)。

向島小梅町のライファン工場で製品（氷蕨）製造開始。ただし、これ以降10数年間赤字経営が続いた（『撫山翁しのお草』鹿島次郎「向島のライファン」）。

※太平洋戦争初期に、資生堂からライファン氷蕨が35銭で売り出された（『資生堂社史』）。

◆昭和十四年◆（1939）潤一郎54歳

午後6時から丸の内東京会館で潤一郎の娘鮎子と竹田龍児挙式。

※久保田万太郎の『吉井勇論』を書く代りに（『短歌研究』S14/6）によれば、久保田万太郎は与謝野品子・中根駒十郎・里見淳・志賀直哉と同じテール。そばのテーブルには、潤一郎・松子と潤一郎の高等学校時代の友人たちが座っていた。笹沼源之助・高木定五郎も列席。

◆昭和十五年◆（1940）潤一郎55歳

潤一郎は笹沼・大塚と京都で落ち合い、縄手の「魚新」で昼食。笹沼から、おい、漬が出てるよ、と言われる（潤一郎『続 松の木影』）。

※昭和30年1月「中央公論」の潤一郎『老いのくりこと』では、4、5年前の秋の末の事としているが、

9？

意図的な転用か？

※この時か？ 笹沼夫人・喜美子嬢を御影に案内した？（潤一郎『続 松の木影』）。

※昭和十一年四月十日交詢社刊行「第四十版 日本紳士録」に、大塚常吉は、京都商工会議所議員、京都ホテル（株）常務、東山、栗田口三条坊町四七、所得税二九四円と出る。

潤一郎は伊香保の千明仁泉亭別館鶴之居に笹沼喜代子・喜美子と避暑（昭和16年9月1日江藤きみ子宛潤一郎絵葉書209）。

※伊香保で六代目菊五郎に会った話は千代子さんも聞いた。六代目が乗馬をしていたなど（1996 8/31笹沼千代子さん私信）。

※昭和16年9月1日付け江藤きみ子宛潤一郎絵葉書に言う《狂態》とは、《彼氏》（菊五郎）がどこの部屋に泊まったのか、翌朝、喜代子と喜美子が二人であちこち見て回った事を指す（喜美子さん直話。1996 9/16笹沼千代子さん私信による）。

※伊香保千明別館に居た時、うしろの別荘に六代目菊五郎と市村羽左衛門が来ていて、毎晩、近所にか



かっている女役者の芝居を呼んで、遣らせていた。潤一郎も或る晩呼ばれて行ったら、「沼津」をやっているのを、菊五郎は、「まるで国語なんて知らななんだからね」と潤一郎に言いながら引つ繰り返って笑って見ていた（座談会「六代目菊五郎の死を逸つて」S 24 / 11「観照」）。

※「六代目尾上菊五郎年譜」に、「八月九月伊香保に遊ぶ」とある。

8・31?

◆昭和十六年◆（1941）潤一郎56歳

4・29 松子の妹・重子（35）と渡辺明（45）挙式（潤一郎『京洛その折々』『三つの場合』）。

12・4

5・22 笹沼源之助の次女・喜美子が江藤哲夫（東京工大薬科卒。笹沼宗一郎と同期。旭ガラス勤務。父・江藤義成医学博士）と結婚する。

12・8

8・22 江藤きみ子宛潤一郎書簡208。

※現存する江藤喜美子宛潤一郎書簡34通のうち最初のもの。きみ子の住所は東京市内大森区新井宿2丁目1722ノ3。

8・23? 中央公論社から刊行していた『潤一郎訳源氏物語』全二十六卷（S 14 / 1 / 16 / 7）が完結したので、

その慰勞のため、潤一郎は、世話になった中央公論の社員・雨宮庸蔵らと、装幀を担当した友人の長野草風を偕楽園に招待。長野草風の硯の絵に「名も知れぬ草にはあれどむらさきのゆかりばかりに花咲きにけり」と詠んだ色紙を雨宮庸蔵に贈った（雨宮庸蔵『偲ぶ草』）。

潤一郎は前年に引き続き、伊香保千明仁泉亭別館鶴之居に避暑。《彼氏》（Ⅱ菊五郎）は小生等の来た日に下山（9月1日江藤きみ子宛潤一郎絵葉書）。

未明、龍児からの電話で鮎子が女の子を出産した事を知る（潤一郎『初昔』）。

早朝、潤一郎は東京に発つ時、大東亜戦争勃発の知らせを聞く。汽車中、嶋中央公論社長と一緒にいる。偕楽園に寄り、宣戦の詔勅と東条首相の講話を聞く。久保田万太郎・笹沼源之助・八田（三喜）氏と一緒に。支那料理を手土産に九段の木下産婦人科病院へ鮎子を見舞う（潤一郎『初昔』初出）。

夜、高木定五郎と上野松坂屋の向いの蛇の目寿司で鮎子のトロの切り身を焼いたマグテキを食べた。今にもアメリカの爆撃機が襲来するのではないかとびく

12・?

びくした(潤一郎『高血圧症の思ひ出』)。  
昭和16年の暮、潤一郎の紹介で、渡辺明を埼玉県与野町にあった笹沼源之助のライファン工業株式会社に入れたが、2年ほどしか続かなかった(潤一郎『三つの場合』)。

※森田家から松子に付いて来た爺やさん「周やん」こと本庄周吉は、戦争中、笹沼宗一郎のライファン工場で小使いとして使って貰い、そこで亡くなった(1997/8/25渡辺清治氏との電話)。

◆昭和十七年 ◆(1942) 潤一郎57歳

4

潤一郎は来宮駅に近い熱海市西山598番地に別荘を購入。もと嶋中央公論社長が借りていたもの(潤一郎『嶋中君と私』)。

午後4時過ぎ、犬丸徹三夫妻・千代子・一郎・二郎で、借家園に食事に出席する。千代子さんは、縁談のことは全く知らなかった。大塚常吉に会う。食後、笹沼宗一郎が料理の説明をしに支那間に出て来る。

これが千代子さんと宗一郎の初対面。ただし、千代子さんには、料亭の息子さんとのみ紹介された。笹沼源之助夫妻は塩原別荘に出掛けていて、留守だっ

8・12

9・5

9・5

9・5

9・17

た(『笹沼千代子日記』及び1996/7/30千代子さん私信)。

犬丸徹三夫妻、京都へ。千代子の縁談のことで大塚常吉に会いに行つたか? 大塚常吉は、京都に家があった(『笹沼千代子日記』及び1997/2/5、14千代子さん私信)。

犬丸徹三が千代子に、笹沼家との間に縁談があることを打ち明ける(『笹沼千代子日記』)。  
高木定五郎が脳溢血の発作で倒れる(潤一郎『高血圧症の思ひ出』)。

※この後、高木は、笹沼源之助の娘・喜美子の岳父・江藤義成博士が築地に開業していた病院に通い、待合室でしばしば潤一郎と一緒にいた(潤一郎『高血圧症の思ひ出』)。

丸の内のレストラン・リッツ(帝国ホテル犬丸関係)で、笹沼一族・鹿島夫妻・江藤夫妻・犬丸徹三夫妻・千代子・一郎・二郎で会う。千代子さんは、これがお見合いであったと後になって思う(『笹沼千代子日記』及び1996/7/30千代子さん私信)。  
犬丸徹三が川奈へゴルフに行くと言うので、千代子

さんもついて行って、一緒にプレーした。母・治子も何故か一緒に来た。午前中にプレーしてホテルに戻ったら、谷崎潤一郎が来たと言われて、会った。これが千代子と潤一郎の初対面。一緒にお茶を飲んだだけで、潤一郎は直ぐに帰って行った。これも笹沼宗一郎の結婚のための下見で、後で潤一郎は笹沼家に報告したと言う。大分、後になって、あれは下

検分だったのか、と思い当たった。当時はまだ縁談があるという事すら知らされていなかった(『笹沼千代子日記』及び1996/4/19、7/24千代子さん直話)。

※『笹沼千代子日記』には、潤一郎の事は興味がなかったと見えて、書いてない。女優・高峰三枝子が来ていた事が書かれている(1996/7/30笹沼千代子さん私信)。

潤一郎が帝国ホテルを訪問。笹沼宗一郎と千代子と、ロビー(?)で会い、一緒に日劇へ行く。銀座で夕食を共にする(『笹沼千代子日記』及び1996/7/30千代子さん私信)。

◆昭和十八年◆(1943) 潤一郎58歳

1 「中央公論」に潤一郎の『細雪』連載開始。  
1? 笹沼宗一郎の入隊任官祝と潤一郎・笹沼源之助の知り合って50周年の金交式を偕楽園でやった。笹沼源之助と親しかった川合玉堂が「ますらを」の絵を宗一郎に贈った(稲沢秀夫『秘本谷崎潤一郎』31-125)。

※「満寿羅夫」は玉堂ではなく長野草風の軸(1998/6/18笹沼千代子さん私信)。

※『撫山翁しのぶ草』江藤義成「笹沼さんあれこれ」によれば、潤一郎と笹沼源之助は、昔の幼稚園時代の学帽・メリンスの兵児帯姿で現われ、皆をあっと言わせた。

※笹沼千代子さんは金交式を見ていない。宗一郎は、結婚前、既に中尉になっていた(1996/7/24笹沼千代子さん直話)。

西山より志賀直哉宛潤一郎書簡703。今度、笹沼源之助嗣子(宗一郎)結婚にて上京。

から2、3日、潤一郎は帝国ホテルに投宿(15日志賀直哉宛潤一郎書簡)。

偕楽園の100畳敷きの大広間で笹沼宗一郎・犬丸千代

2・18

2・18

2・15

子華式。杯事のみで、所謂神前結婚ではなかった。

潤一郎・松子も列席。竹田龍児・鮎子も出席した。

仲人は八田三喜（1996/7/24 笹沼千代子さん

直話及び1996/8/7 千代子さん私信）。潤一

郎らは帝国ホテルに泊まる（1997/2/5 笹沼千代子さん私信）。

※八田三喜は元三中の校長で、笹沼源之助の恩師。

※この時、笹沼源之助・潤一郎の金交50年の祝いに、

2人が巨大な盃で飲み交わした（1996/7/24 笹沼千代子さん直話）。

帝国ホテル・パンケットホールで、笹沼宗一郎・犬

九千代子結婚披露宴。潤一郎も松子も列席。松子は

九龍で美しかった。竹田龍児・鮎子も出席した（1

996/7/24 笹沼千代子さん直話及び1996/

8/7 千代子さん私信）。潤一郎らは帝国ホテルに

泊まる（1997/2/5 笹沼千代子さん私信）。

笹沼宗一郎・千代子と笹沼源之助・喜代子・犬丸徹

三・治子と帝国ホテルで昼食。午後箱根へ新婚旅行。

雪。箱根富士屋ホテル泊（1996/8/7、12 笹沼千代子さん私信）。

2・22

新婚旅行中の笹沼宗一郎・千代子が、夕方、熱海ホ

テルに着いてすぐ、熱海の谷崎別荘に来て、夕食の

牛肉のすき焼きを食べて、ホテルに帰った。千代子

は潤一郎の話が面白く、時の経つのを忘れた。松子

も一緒に4人で夜遅くまでおしゃべりをした。22日

夕刻の訪問は、前もって約束していたものと思われ

る（1996/8/7、12 笹沼千代子さん私信）。

熱海ホテルの食事が宗一郎には足りなくて、宗一郎

が潤一郎に電話、夕方、再度谷崎別荘に来て、夕食

を食べて、最終の汽車で東京に帰る。潤一郎は千代

子の靴下の色がとてもいいと褒めた（1996/8

/7、12 笹沼千代子さん私信）。

※後で潤一郎は笹沼に電話し、「あの二人はお野菜

には見向きもせずに、肉ばかり食べて行ったよ」、

と報告した（1996/4/19 笹沼千代子さん直話）

（1996/7/24 補足 新婚旅行は多分、熱海2

泊、箱根2泊ぐらいだった。戦争中でなければ、海

外旅行をする筈だった。熱海ホテルは潤一郎が取っ

3・16

潤一郎上京、偕楽園に一泊（11・12 日志賀直哉宛潤

2・19

一郎葉書)。同日、浅草永見寺で笹沼源吾の三十七回忌の法要が営まれる。潤一郎・津島寿一・君島一郎が列席(『笹沼千代子日記』)。

宗一郎・千代子は、向島小梅の笹沼別荘に住む(1997/2/5 笹沼千代子さん私信・『撫山翁しのぶ草』巨理達郎「向島の思い出」)。

畑中繁雄が陸軍報道部に呼び出され、杉本和朗少佐らに「撃ちてしまん」の標語を表紙に刷り込まなかった事を反軍態度と極め付けられ、『細雪』はこの戦時下に不謹慎極まる等と攻撃される(畑中繁雄

「夢魔の一時期」新書判谷崎潤一郎全集月報19、畑中繁雄『生きてゐる兵隊』と『細雪』をめぐる) S 36/12 「文学」)。

潤一郎が偕楽園を訪問(『笹沼千代子日記』)。

※この頃、『細雪』が陸軍報道部から「この戦時下に不謹慎極まる」等と攻撃されている事について、潤一郎が笹沼源之助・喜代子と話をしていた。また、原稿が空襲で失われないように、潤一郎はとても気を使っていた(1997/2/12 笹沼千代子さん私信)。

※『細雪』が問題になった頃(S 18/4)、潤一郎は大丸徹三に、サインをしたりすると官憲の待遇が違うと言っていた(1996/4/19 笹沼千代子さん直話)。

智積院(谷崎セキ)累積院(谷崎倉五郎)二十七回忌法事後の、午後5時から偕楽園で会食。潤一郎・松子・鮎子夫妻など出席。精二とその娘・恭子・順子、恭子の夫・上山氏らも出席したか?(4月25日 精二宛潤一郎書簡・『笹沼千代子日記』)。

「中央公論」に『細雪』連載中止の社告を掲載。

笹沼源之助・喜代子、谷崎宅に来る。熱海泊(『笹沼千代子日記』)。

潤一郎、花岡芳夫と一緒に偕楽園に行く(『笹沼千代子日記』)。

鹿島登志(登代子の長女)の七五三で、潤一郎・鹿島登代子・江藤喜美子・犬丸治子が偕楽園に集まる(『笹沼千代子日記』)。

笹沼源之助の娘・喜美子の岳父・江藤義成博士が築地に開業していた病院で高木定五郎・大隅太夫と一緒にになり、江藤氏も交えて、二、三十分話をし、潤

一郎は一足先に帰る（潤一郎『疎開日記』）。

笹沼源之助の孫（宗一郎・千代子の長女）・登喜子誕生（写真3）。

※潤一郎は、千代子の娘・登喜子をととても可愛がっていた。丸顔で目が丸い子だった。潤一郎はホッペタにチューしてはいやかられていた（1996／4／19 笹沼千代子さん直話）。

※登喜子は、恵美子の後継者であり、たをりの先駆けである。潤一郎には子供嫌いというイメージがあるが、自分の子供を持ちたがらなかっただけで、特に女の子に対しては、一貫して愛着を示している。

（写真3）昭和21年10月、犬丸宅庭にて。笹沼登喜子

久保田万太郎が演劇視察のため、上海キャセイホテ

◆昭和十九年◆（1944）潤一郎59歳

ルに約1ヶ月滞在。大塚常吉と邂逅（『撫山翁しのぶ草』久保田万太郎「笹沼さん」）。

笹沼源之助から電報で高木定五郎の死を知らされる

（潤一郎『高血圧症の思ひ出』）。

朝8時16分来宮発で上京。11時東京着。中央公論社

により、嶋中雄作社長と話す。深川木場4丁目の高

木定五郎の告別式（午後1時から2時まで）に出る。

笹沼源之助・江藤・木村錦花・長野草風・渡辺明に

会う。江藤氏息（哲夫）と借楽園に行く。宗一郎夫

人（千代子）に赤ん坊・登喜子を見せて貰う。3時

半辞去。中央公論社に預けた荷物を取り、東京駅へ。

松子・重子・恵美子・渡辺明・清治が見送りに来る

（潤一郎『疎開日記』『高血圧症の思ひ出』）。

この日付けの笹沼源之助の書簡あり。3月3日内孫

の初節句祝賀会の招待。会社は陸軍監督工場になっ

た（潤一郎『疎開日記』2月28日）。

※この秋頃、ライファン工業は陸軍糧秣廠を初め、

軍関係の管理工場の指定を受けて、激しく増産を要

求されていた（『撫山翁しのぶ草』大森作三「前社

長への或る思い出)。

笹沼家内孫・登喜子の初節句でこの日午後5時より帝國ホテルで開かれた犬丸氏の招宴に、潤一郎・松子も出席。来会者は犬丸家の他に、笹沼源之助・喜代子・宗一郎・千代子・鹿島龍藏夫妻・鹿島次郎・登代子・登志・江藤義成夫妻・江藤哲夫・喜美子・川島海軍中将夫妻・八田三喜夫妻・長野草風ら。鹿島氏と寂敵・良寛・伊藤博文・副島蒼海の書の事を語る。八田三喜氏が笹沼から貰った木村錦花著『守田勘弥』に、潤一郎は《本年最後の美酒佳肴》と揮毫する。竹田(龍児・鮎子)方に泊る(潤一郎『疎開日記』)。

3・5

※この日、潤一郎が千代子に贈った《絹袖パジャマ》(潤一郎『疎開日記』)はピンクと薄いブルーの縞柄だったが、偕楽園と共に焼失。川島海軍中将は川島令次郎で、犬丸徹三・治子夫妻の仲人。天皇の親任厚く、当時は有名な人だった。潤一郎は、犬丸徹三が人の肩を叩くこと、ドアで女性を先に入れるレディーファーストなどの西洋的礼儀作法をいやがっていた。犬丸徹三は人を招待する時も、必ず夫婦一

3頃

緒に招待した(1996/9/16笹沼千代子さん私信)。

※鹿島龍藏は、(俵)鹿島組取締役。

※この日の『疎開日記』中に、《ライファン入り塩フリー包》とあり、潤一郎がライファンを使用していた事が判る。

警視庁、高級料理店(精養軒・錦水ら850店)・待合芸妓屋(4300店・芸妓8900人)・バー・酒店(2000店)を閉鎖。

※偕楽園も休業させられ、そのまま廃業する(潤一郎『幼少時代』)。

※ただし、実際には、役人・外交官などの会合場所として、密かに営業を続けていた(1996/7/24笹沼千代子さん直話)。

渡辺明はバラチフスで入退院後、間もなくライファン工業株式会社を辞め、函館船渠会社の工場の現場監督として月給300円以上で北海道へ行く事になる(潤一郎『三つの場合』)。

※渡辺明はお世辞のうまい人だった。渡辺明がライファンに勤めていた時、潤一郎が月給が安いと文句

を言った。笹沼源之助らは困っていた(1996 / 7 / 24 笹沼千代子さん直話)。

4・27

午後6時半頃、東京から松子と笹沼喜代子夫人が同じ汽車に乗って来る。お喜代さんは瘦せ、年を取った。過労で衰弱、昨日やっと床を離れた。一つには食糧不足のせい。借楽園を廃業して気が緩んだせいもある。29日に笹沼源之助が来るまで静養する。

お喜代さんは恋月荘に泊まる(潤一郎『疎開日記』)。

4・28

お喜代さんと終日語り暮らす(潤一郎『疎開日記』)。

4・29

午後2時頃笹沼源之助来る。4人で散歩、食事(潤一郎『疎開日記』)。

7・6

潤一郎上京、借楽園に至る。借楽園は大東亜省に貸すことになった由(潤一郎『疎開日記』)。

※大東亜省に貸したというのは、形式を整えるためだったと思われる(1996 / 7 / 24 笹沼千代子さん直話)。

7・12

潤一郎上京、借楽園で夕食(潤一郎『疎開日記』)。

※これ以降、笹沼家は、駕籠町(小石川区の?)に暫く住む? (『撫山翁しのお草』八田元夫「父を通してみた笹沼さんの印象」)。

◆昭和二十年◆(1945) 潤一郎60歳

1・27

帝国ホテル爆撃で死者6名。銀座・京橋・日比谷で死者100名(『笹沼千代子日記』)。

1・28

日本橋笹沼家で、笹沼千代子は竹田鮎子に会う。6月に出産予定と聞く。昼夜空襲。10時、警戒サイン(『笹沼千代子日記』)。

3・9

夜12时空襲。空一面真っ赤。電話不通(『笹沼千代子日記』)。

3・10

※東京大空襲で江東地区全滅。焼失23万戸。死傷者12万人。

朝、笹沼宗一郎から千代子に電話。無事とのこと。

向島は特にひどく死者多し。笹沼源之助・喜代子夫妻は帝国ホテルに泊まる(『笹沼千代子日記』)。

潤一郎は熱海で帝都大空襲の噂を聞く(潤一郎『疎開日記』)。

潤一郎は熱海で、日本橋神田下谷本所深川浅草は一望の焼け野原で死人何万なるを知らずと聞き、借楽園の安否なども気遣わしければ、明日見舞いに出京せんと決心す(潤一郎『疎開日記』)。

潤一郎・松子は午後2時37分の汽車で熱海を発つ。

3・11

3・12



来宮のフォームで借葉園の焼失を知る。横浜で東横線に乗り換え、ふと思いついて田園調布に下車、大丸邸を訪ねる。千代子と会う。笹沼源之助夫妻はホテルに避難していると聞き、電話でお喜代さんと話す。笹沼夫妻は明日、大和村の鹿島次郎氏方に立ち退き、与野に疎開すると言う。30分ほどで辞去。渋谷に着き、玉川電車は満員故、歩いて松平邸に至る。子爵は熱海に行つて留守。和子さんと老女中のスミさんの世話になる。電話を永井荷風・嶋中雄作・土屋計左右・松林氏・柚氏にかける。永井氏・嶋中氏は不通。ホテルの笹沼源之助と電話で話し、明日午前中に行く約束をする(潤一郎『疎開日記』)。(12の誤りと思われる)谷崎夫妻、田園調布に見える。無事を喜んで下さる。登喜子を抱いて、田園調布駅までお送りする。帝国ホテルへ行かれる(『笹沼千代子日記』)。	3 · 15
※この時、登喜子がカラスの声・タスキの顔などの芸をして、潤一郎を喜ばせた(1996/7/24笹沼千代子さん直話)。	3 · 15
潤一郎は帝国ホテルに笹沼夫妻を見舞う。幸い与野	3 · 20
	4 · 23
	4 · 25
	5 · 15
	6 · 4

のライファン工場の近くに売り家ありてそれを買いたれば近々お喜代さん・キミちゃん母子らそこへ移り、笹沼は鹿島氏方へ身を寄せると言う(潤一郎『疎開日記』)。

田園調布も危ないので、笹沼千代子は登喜子と2人、トラックで与野へ引越す(『笹沼千代子日記』)。

毎夜、東京・名古屋空襲。笹沼源之助・喜代子も与野に来る。硫黄島陥落。江藤一家・哲夫・喜美子・登美子も同居(『笹沼千代子日記』)。

※江藤喜美子宛潤一郎書簡の宛先は、昭和20年7月2日(29)以降、与野の笹沼方になっている。

笹沼源之助・喜代子、潤一郎を訪問。熱海泊(『笹沼千代子日記』)。

笹沼源之助・喜代子、帰宅。谷崎さんは津山へ疎開なさりたいとのこと(『笹沼千代子日記』)。

潤一郎一家は津山着。岡山県津山市小田中八子(東照宮廟前の松平康春子爵(美作津山10万石、渡辺明の兄)別邸愛山岩々庵に再疎開(潤一郎『都わすれの記』『疎開日記』・全集年譜)。

潤一郎は勝山に行き、小野はる方を訪ね、離れの?

階6畳2間1階8畳2間を借りる事にし、部屋代65円を手付け代りに支払う(潤一郎『疎開日記』)。

※潤一郎1人だけ、先に書斎として使い始めていたらしい。9月6日付け木村毅宛書簡によれば、最初は津山と勝山と両方に住むつもりだったが、汽車の切符が手に入りにくいので、津山を引払った。敗戦。

※敗戦後、借家園再興を勧められた際、笹沼源之助は、〈闇で仕入れて二重の帳面付けをするような不愉快な商売を家人にやらせたくない〉と答えたと言う(『撫山翁しのぶ草』奥山八郎「仁徳院撫山源翁居士を憶ふ」)。

※敗戦後、笹沼源之助はライフファン工業に専念し、食品工業向けケーシングなどの新用途を開拓し、一大発展を遂げた(『撫山翁しのぶ草』鹿島次郎「向島のライフファン」)。

マッカーサー元帥本土に(『笹沼千代子日記』)。

マッカーサー元帥、東京に入る。犬丸徹三がマッカーサーのジープに同乗し、東京を案内する(『笹沼千代子日記』)。

嶋中雄作宛潤一郎書簡。21日あたり出発、大阪に二泊後、25日頃上京。本日『細雪』続稿50枚ほど松林氏に送った。東京では埼玉県北足立郡与野町下落合900笹沼源之助方に1週間滞在する(水上勉『谷崎先生の書簡』)。

(電報が来て)谷崎さんがいらっしやると云うので、掃除したり、食事の支度をしたが、いらっしやらなかった(『笹沼千代子日記』)。

戦後初めて上京し、中央公論社を訪ねる。嶋中雄作が病臥中のため、新副社長・嶺山政道らに会う。埼玉県与野の笹沼源之助方に泊る。12月(11月の誤り)6日まで毎日、与野と東京を往復する(潤一郎『三つの場合』三「明さんの場合(細雪後日譚)」)。

朝、谷崎さん見え、子供を可愛がって下さり、楽しく賑やか。夜はとて早くお休みになる(『笹沼千代子日記』)。

谷崎さんは御気分悪く熱が7度ある。夕食、魚と肉

(『笹沼千代子日記』)。

よい天気だが、谷崎さんまだ御気分悪そう。午前中にお蕎麦を打ったら、美味しいと褒められる。私の

は、〈闇で仕入れて二重の帳面付けをするような不愉快な商売を家人にやらせたくない〉と答えたと言

う(『撫山翁しのぶ草』奥山八郎「仁徳院撫山源翁居士を憶ふ」)。

マッカーサー元帥本土に(『笹沼千代子日記』)。

マッカーサー元帥、東京に入る。犬丸徹三がマッカーサーのジープに同乗し、東京を案内する(『笹沼千代子日記』)。

10・31

グリーンのセーターを褒めて頂き、嬉しい。長野草風さんがいらっしやって泊まる（『笹沼千代子日記』）。

長野さんはお出掛け。谷崎さんは8畳間で書き物をしていらっしやる。登喜子が大人しくて助かる。夕食、借菜園の支那料理・かぼちゃでにぎやかな夕食。谷崎さんが面白い事ばかりおっしやり、皆を笑わす（『笹沼千代子日記』）。

11・1

谷崎さん・長野さんお出掛けになる。夕方谷崎さん米園子ヨコレートのお土産。夕食共に。長野・谷崎泊（『笹沼千代子日記』）。

11・2

谷崎さん・長野さん、午前に帰られた。（谷崎さんは）第二ホテル土屋計左右さんによべられたとの事（『笹沼千代子日記』）。

※長野草風は、借菜園の美術顧問のような存在だった。上品な人だった。晩年、潤一郎と出会った時の様子では、仲が良いとは思えなかった。長野草風は、長野県の疎開先から、米を持参して泊まりに来た。1日分づつ、きっちり1合入りの米袋を差し出した（1996/7/24 笹沼千代子さん直話）。

11・4

※昭和24年2月6日に長野草風が死去した際の、3月14日付け安田朝彦宛潤一郎書簡370に、この10年ほど感情の行き違いがあつて疎隔していたので、弔意を表し香華などは供えたが、葬儀には欠席した、とある。

午後、東宝のエノケン一座どもり奇談・東海道中記を見に、劇場で谷崎さんと（『笹沼千代子日記』）。

※『東宝三十年史』によれば、正岡容原作『膝栗毛の出来るまで』。12月以降は進駐軍に接収され、アーニー・バイル劇場となる。

◆昭和二十一年◆（1946）潤一郎61歳

潤一郎、新生社を訪ね、青山虎之助と昼食（『回想の新生』青山虎之助日記）。

谷崎殿下（この頃、殿下などと内輪で呼んでいた）がいらっしやると云うので大忙し。ガラスふき、片づけ、草餅を作るやら、夕方までよく働く。谷崎殿下夕方いらした。草餅おいしいと甘い物もお好き。夜は色々楽しいお話（『笹沼千代子日記』）。

※与野の家は狭くて汚く、潤一郎が来ると決まると、ガラス磨き・畳拭き・（狭い）庭掃除・ドブ浚えに、

開市で料理の材料調達と一苦勞だった。当時、天皇陛下が行幸すると、道路も街もすぐ綺麗になったので、「谷崎殿下が時々いらっしやらないと家中綺麗にならない」と笑っていた。この家には、笹沼源之助・喜代子と宗一郎一家と江藤一家4人で13年間暮らした(1996/9/16 笹沼千代子さん私信)。

※この年、天皇が2月19日に群馬県、2月28日に東京都、3月25日に群馬県、3月28日に埼玉県を巡幸した事と関係がある。

4・11

午前中、谷崎さんお出掛け。夕方、谷崎さんお帰り。小父様(潤一郎)のお話は面白い。夜まで賑やか(『笹沼千代子日記』)。

谷崎さんお帰りになるが、源之助・千代子と帝劇菊吉、「息子」「大寺学校」「保名」帰りにチャップリン映画「ゴールドラッシュ」(『笹沼千代子日記』)。

5・20

※帝国劇場で菊五郎の「大寺学校」を見たが、余りよくなかった。「息子」も見た。「四千両」は駄目だった(潤一郎『親不孝の思ひ出』・座談会「六代目菊五郎の死を透つて」S24/11「鏡照」・「芸を語る」S23/2「小説新潮」)。

11・24

※『帝劇の五十年』によれば、3月7日、4月25日まで、昼の部で「四千両小判梅葉」「高時」、夜の部で「息子」「保名」「大寺学校」。

4・10

大塚常吉氏、上海より7日に帰国なさった。夕方、大塚さんにお招きして、大丸の父母私、谷崎さんも後からいらした(帝国ホテルの父の部屋カリッツ不明)。夕食後、与野に谷崎さん泊りにいらっしやる(『笹沼千代子日記』)。

午前中ライファンのトラックで東京まで。谷崎さんトラックの運転台に、千代子は後に。大塚さんは京都へ行かれるそうだ。谷崎さんは熱海へ(『笹沼千代子日記』)。

青山虎之助・宇野浩二・東郷青児と会食(『回想の新生』青山虎之助日記)。

潤一郎は、京都市上京区寺町通り今出川上がる5丁目鶴山町(3番地の1)中塚せい方の2階に間借する(潤一郎『台所太平記』)。

※以後、昭和31年12月まで、潤一郎は京都に住む。京都市左京区南禅寺下河原町52番地に転居。「潺湲亭」と名付ける(潤一郎『三つの場合』)。

12・11

(全集では11月になっているが『松竹七十年史』によれば顔見世は12月3日から) 江藤喜美子宛潤一郎書簡317。南座顔見世の菊五郎の「吉田屋」を見るのと2回。久しぶりに楽屋訪問。伊香保以来の対面。月末に今一回六ちゃんと同席のお座敷有り。

※《伊香保》は昭和15年のこと。(六ちゃんと同席のお座敷)は、昭和22年3月「観照」に掲載された座談会「吉田屋」検討。

12・21

笹沼源之助京都へ。大塚さん・谷崎さんとお楽しい事だろう(『笹沼千代子日記』)。

◆昭和二十二年◆(1947)潤一郎62歳

谷崎さん(3月13日)「読物時事」に書いて居られる(『笹沼千代子日記』)。

※「読物時事」5月号に掲載された潤一郎の『三月十三日の記録―昭和二十年春の日記より』のこと。これは後に『疎開日記』に収録された。

※潤一郎は、自作や座談会が雑誌に掲載される時、

刊行される時には、必ず電話や手紙で知らせたと言う(1997/2/3笹沼千代子さん私信)。

大祖母(笹沼東)三十七回忌永見寺。借楽園の料理

6・9

6・29

を作り、午前中に永見寺へ。女中さん達大勢見える。大塚さん・谷崎さん上京されず(『笹沼千代子日記』)。

谷崎さんより『細雪』(中巻)送って下さる(『笹沼千代子日記』)。

11・8

熱海より谷崎さん見える。夜遅くまで小父様のロマンスをきかせて頂く。お若さに驚く(『笹沼千代子日記』)。

※この《ロマンス》は松子との事ではない(1996/9/16笹沼千代子さん私信)。

11・9

午前中から鹿島登代子夫妻見え、谷崎さん囲んで楽しい。泊。又停電で何も出来ない。明日谷崎さんは東京へいらっしやるそうだ。もしかすると、又、与野に来られるそうだ(『笹沼千代子日記』)。

12・11

江藤喜美子、2人目の女子出産(『笹沼千代子日記』)。

◆昭和二十三年◆(1948)潤一郎63歳

熱海第一ホテルより潤一郎の笹沼夫妻宛年賀葉書

332。お正月中に1度御来遊被下度候。

笹沼源之助、熱海谷崎さんへ(『笹沼千代子日記』)。

笹沼源之助、谷崎さんから夜11時過ぎにお帰り(『笹

1・18

沼源之助、谷崎さんから夜11時過ぎにお帰り(『笹

1・19

沼千代子日記

1・20

潤一郎は、中学時代以来の旧友で第一ホテル社長・土屋計左右の好意により、熱海市上天神町山王ホテル内にある土屋計左右所有の貸別荘61号に移る。以後、夏冬を中心に、しばしば熱海に滞在する。

2・17

熱海山王ホテル内別荘から江藤きみ子宛潤一郎書簡341。赤ちゃんも可愛くなったことでしょう。お喜代さんに遊びに来て貰いたい。

5・26

夕方近くに谷崎さんいらっしゃる(『笹沼千代子日記』)。

5・27

午後、谷崎さん・宗一郎と千代子、常盤座・ロック座。浅草の見世物を見て驚く。谷崎さん随分ふとられた(『笹沼千代子日記』)。

※『松竹七十年史』によれば、この日の常盤座は、

川端康成原作『浅草紅団』とテカメロンショウ「覗かれた女線」。

※常盤座はヘレン滝、ロック座はメリー松原の時代

(橋本与志夫『ヌードさん』)。

※ヘレン滝・メリー松原ともに、千代子はとても美人だと思ったが、潤一郎は好まなかった。常盤座に

は、既に行った事がある風だった。ヘレン滝は、花道から観客の顔や頭を撫でていた。楽屋へ行ったのは日劇小劇場の時。千代子がストリップに同行した

際は、これ以後、喜美子と一緒だった事があるだけで、松子・笹沼喜代子・宗一郎と行った事はないと

記憶している(1996/9/16 笹沼千代子さん私信)。

谷崎さんは夕食をすませてお帰りになった(『笹沼千代子日記』)。

新橋演舞場京舞。喜代子も。谷崎さんは福田屋泊(『笹沼千代子日記』)。

沼千代子日記

※5・27〜29 新橋演舞場で初の東京公演「京舞の会」開催(京都新聞編集局編『京舞』S 35/4 淡交新社刊)。

※武智鉄二司会による潤一郎・井上八千代・井上佐多の座談会「京舞を語る」(S 24/3 「邦楽と舞踊」創刊号)によれば、潤一郎も見た。「鶯娘」「妹背山」など。

谷崎さんは今日、永井荷風氏とナイトクラブへいら

っしゃる由(『笹沼千代子日記』)。

5・30

5・29

5・28

5・27

5・26

5・25

5・24

5・23

5・22

5・21

5・20

5・19

5・18

5・17

5・16

5・15

5・14

10・7	10・6	7・31	7・30	6・4	6・1	5・31
小滝穆が永井荷風宅を訪ね、潤一郎が午後6時、銀座万年堂で待っていると伝える。共に万年堂に至り、万年堂の案内でカフェー及び舞踏場を見る。尾張町三越裏の舞踏場に益田隆一座の舞踊あり(『永井荷風日記』)。	谷沼源之助・喜代子・登代子、熱海の谷崎さんへ(『笹沼千代子日記』)。	熱海へ電話通じず、電報で用を済ます(『笹沼千代子日記』)。	笹沼源之助・喜代子・登代子帰宅(『笹沼千代子日記』)。	谷崎殿下がいらっしやるので支那料理を作るので大忙し。夕方、谷崎さん見ゆ。夕食後、鹿島夫妻。夜遅くまで楽しい夜(『笹沼千代子日記』)。	谷崎さん午前中にお帰りになる(『笹沼千代子日記』)。	嵐の中、谷崎さんいらした。泊(『笹沼千代子日記』)。
11・30	10・8	12・9				
喜子はとても色気があると困った事をおっしゃる。	谷崎さん、1日中ゆっくりしていらした。夕食うなぎと階菜園料理(サーメン)小父様(潤一郎)が登					

5歳の子に。夜遅くまで(『笹沼千代子日記』)。  
 日比谷でクロイツァー(ピアノ)ベートーベン・ソナタ4曲。谷崎さんと宗一郎・千代子(『笹沼千代子日記』)。  
 熱海山王ホテル内別荘から江藤喜美子宛潤一郎葉書357。直侍氏より御聞取のことと存候。東劇「春雨傘」  
 暁雨は海老蔵なりや幸四郎なりや。海老蔵ならば一寸見に行きたい。お喜代さんは非一度御来遊願う。君か千代子さんがお供して。赤ん坊付きでも差し支えなし。  
 ※《直侍氏》は江藤哲夫のこと。やせ形で背丈が高かったので、市村羽左衛門のイメージで、潤一郎がこの頃しきりに言っていた(喜美子さん直話。1996/9/16 笹沼千代子さん私信による)。  
 ※《東劇》は新橋演舞場の間違い。『松竹七十年史』によれば、12月7日から夜の部で、海老蔵・幸四郎らによる「侠客春雨傘」などを上演。  
 笹沼千代子は朝7時に家を出て、登美子・登喜子をつれて、3人でお弁当を汽車の中で食べさせる(勿論手作り、未だ食糧は配給)。昼頃、山王ホテル。

12・10

小父様（潤一郎）と熱海銀座で喜夕（喜多八?）。フライがおいしくて、子供達大喜び（『笹沼千代子日記』）。

※青山虎之助『美食と共に』によれば、青山虎之助は時折潤一郎を重箱に誘った。潤一郎は青山虎之助に、熱海の鮎屋和可奈、洋食のスコット、とんかつの喜多八などを紹介した。

◆昭和二十四年  
3・30

朝兼昇をいただいて、ワニ園へ行く。ワニは寝てばかりいる。「わかな」というお寿司屋で。小父様（潤一郎）がとても御親切によくして下さり、楽しい日だった。夕方、4時43分沼津発。小父様ホームまで送って下さる。家へついたのは夜8時半（『笹沼千代子日記』）。

3・31

谷崎さんお風邪で与野にいらっしやれなくなる（『笹沼千代子日記』）。

12・17

潤一郎は上京、新橋演舞場で夜の部「俠客春雨傘」を見る。海老蔵の暁雨は着付けが下手で、男女蔵の釣鐘庄兵衛に食われた。楽しみにしていた「臭え臭え」の所が無く、庄兵衛が切腹しないなど物足らなかった。九代目団十郎の時は、「大口屋奥座敷の場」

「向島花見の場」「薄雲の両親が殺される浪宅の場」「薄雲が男装して廓を抜け出す場」などがあった（昭和24年1月24日江藤喜美子宛潤一郎書簡364）。

◆昭和二十四年  
3・31

谷崎さんがいらっしやるので偕楽園菊花鍋・かに・キータン（『笹沼千代子日記』）。

※キータンは偕楽園の有名な料理で、豚の肩ロースを2度挽きして、卵で鳴門巻にした独特の美味しい料理（1998・6/18笹沼千代子さん私信）。

※恐らく潤一郎の『高血圧症の思ひ出』や『撫山翁しのお草』の巻尾に』に出る鶏蛋肉のこと。

正午から3時過ぎまで、潤一郎は、芸術院会員の芸能関係者尾上菊五郎・中村吉右衛門・坂東三津五郎・喜多村緑郎・豊竹山城少掾・吉住小三郎・稀音家浄観・富崎春昇・宮城道雄・近衛秀麿・安藤こう・信時潔と共に天皇の招待で会食した（4・1「朝日新聞」記事）。

谷崎殿下1日中宮様でもいらっしやるような騒ぎ。天皇陛下に拝謁を賜ったいろいろなお話をして下さい。珍しいお話ばかりだった（『笹沼千代子日記』）。



4・1	谷崎さん8時頃までグーグー。きつと昨日お疲れになつたのだ。おでんの朝食。甘い物もお好きだ。昼12時頃中央公論社へ(『笹沼千代子日記』)。	7・5	江藤喜美子宛潤一郎葉書386。あれから菊五郎再訪、三升とも久しぶりに対面。明6日帰洛。お婆ちゃん(喜代子)とトヨ(鹿島登代子)ちゃんに是非お待ちすると御伝え下されたく候。
4・8	千代子男子出産。花祭りの日だと父上およろこび。源之助の助と祖母の東をとり、東助と命名。千代子は反対して、父が再び東一と命名して下さる(『笹沼千代子日記』)。	7・10	午後0時35分、六代目菊五郎死去(潤一郎『三つの場合』)。
4・29	潤一郎は、京都市左京区下鴨泉川町5番地に転居(潤一郎『三つの場合』)。「後の潺湲亭」と呼ばれる。	11・3	谷崎さん文化勲章。夕食、父源之助・宗一郎・登代子・喜美子・千代子、福田屋へお招かれ。お目出度い日(『笹沼千代子日記』)。
7・1	潤一郎は東京創元社で松子と落合い、同社小林氏の招待で下谷の博雅に支那料理を食べに行く。夜、松子は森田家、潤一郎は与野の笹沼方に泊(潤一郎『三つの場合』)。		※潤一郎は笹沼源之助・宗一郎・登代子・喜美子を福田屋に招いて、夕食を共にした。笹沼一家が帰宅したのは夜10時過ぎ。喜代子については不明。千代子は子供の世話があり、行かなかつた(笹沼千代子さん私信)。
7・4?	潤一郎は、弁護士会会長奥山八郎・笹沼喜代子・江藤哲夫・喜美子などと銀座に出た際、六代目を見舞う気になり、毎日新聞の山口久吉氏に案内を乞うて、築地の六代目邸に行った。最初午前中に訪ねた時は、睡眠中だったので、銀座の元華族夫人が開業していた「夏目」で昼食後、再訪して会った。市川三升 <small>11</small>	1・16	喜代子と潤一郎会う(『笹沼千代子日記』)。
(5?)	十代目団十郎と同座(潤一郎『高血圧症の思ひ出』)。	3・3	潤一郎、与野に泊。洋装で若々しい(『笹沼千代子日記』)。
	◆昭和二十五年◆(1950)潤一郎65歳		
	NHKラジオで山本安英による『細雪』の朗読放送(『笹沼千代子日記』)。		

朝食後、10時過ぎ、潤一郎は東京へ。千代子らが駅まで送る(『笹沼千代子日記』)。	3・4		
潤一郎は熱海市仲田805番地(現・熱海市水口町3の9)に別荘を購入し、「雪後庵」と名付け、移転する(10日宮本信太郎宛潤一郎書簡401)。	3・7		
夜10時、大塚常吉危篤の電報(『笹沼千代子日記』)。	3・9		
※潤一郎『撫山翁しのご草』の巻尾に「では、この日死去となっている。」	3・9		
笹沼源之助、東京9時の急行で京都へ向かう。ライファン工場に「脳溢血で大塚死す」の電報(『笹沼千代子日記』)。	3・10		
潤一郎も大塚の訃報に驚き、熱海からつばめで京都に帰宅。夕食中に大塚宅から虎のぶうさん(酔った笹沼源之助)の電話。午後9時から1時間弔問(12日笹沼喜代子宛潤一郎書簡402)。	3・11		
喜代子、京都へ。日帰り(『笹沼千代子日記』)。午後6時頃、潤一郎は吉初へぶうさんと河村(大塚常吉の俳句仲間、中学の同窓)で行く。自宅で飲まれる事を恐れたため。午後10時、笹沼を残して帰宅。源之助1人で1升5合も飲んだ(19日潤一郎書簡)。	3・12		
		3・19	
		3・26	
	4・5		
	4・6		
	4・13		
※『昭和十五年十一月 東京府立第一中学校如蘭会及現在生徒名簿』によれば、河村は河村英熊で、明治38年卒・工学士・辻紡績会社取締役・京都市左京区吉田上阿達町21。			
※潤一郎は、プーさんは、酒を飲んだら3文の値打ちもないよ、と言った。京都に源之助が遊びに行った時、プーさんを1人で寄越すなど手紙で怒った事がある(1996/4/19笹沼千代子さん直話)。			
下鴨から江藤喜美子宛書留潤一郎書簡403。源之助の大酒を止めさせなければいけない。小生は27、8日頃熱海に参り、4月5、6日頃帰洛。ぶうさん御喜代さんの御入洛をお待ち申上げ候。			
下鴨から江藤喜美子宛潤一郎書簡405。24日付け返書拝受、安心した。			
笹沼源之助宛潤一郎書簡着信(『笹沼千代子日記』)。			
潤一郎、与野に泊(『笹沼千代子日記』)。			
潤一郎はいつもより早めに起き、笹沼源之助と東京へ(『笹沼千代子日記』)。			
夜から払暁へかけて熱海大火災、谷崎夫妻は京都に居て、梅と小夜が雪後庵の留守を預っていた。類焼			

を免れる(潤一郎『台所太平記』)。

4・14

ラジオか新聞で、熱海銀座通り殆ど焼失と報じられる(『笹沼千代子日記』)。

4・24

宗一郎・喜美子が熱海谷崎宅へラジオを持参(『笹沼千代子日記』)。

5・28

喜代子が女中2人と浦和へ映画『痴人の愛』を見に行く(『笹沼千代子日記』)。

7・5

午後、江藤義成・喜美子・笹沼源之助とで、熱海谷崎宅へ。2泊する(『笹沼千代子日記』)。

※秋に笹沼源之助が雅号を撫山と決める。展覧会に

作品出品のため(『撫山翁しのぶ草』奥山八郎「仁徳院撫山源翁居士を憶ふ」)。

※恐らくこの後、塩原の別荘を撫山荘と名付けられた(『松竹七十年史』)。

江藤喜美子宛潤一郎書簡428。30日頃熱海へ行き、11月2日上京、4日新橋演舞場の東をどりを経て、5日以後4、5日熱海に滞在、その間に1度お喜代さんに来て欲しい。10日頃帰洛予定。

※しかし、10月31日下鴨湯渡亭から東京都世田谷区深沢町309中之庄谷三次郎方水島芳子宛松子書簡あり。

10・21

11・20

り。潤一郎も松子も風邪で熱海行きは11月中旬に延期(稻沢秀夫『秘本谷崎潤一郎』4-155)。

潤一郎は喜代子・登代子・喜美子・千代子等新橋演舞場の東踊りに招待。松子も一緒。銀座ナンシーで夕食を共にし、銀座を歩く(『笹沼千代子日記』)。

※新橋演舞場東をどり夜の部で、舟橋聖一の脚色演出で『少将滋幹の母』舞踊劇化上演(橋弘一郎『谷崎潤一郎先生著書総目録』・『松竹七十年史』)。

◆昭和二十六年◆(1951)潤一郎66歳

NHK「朝の訪問」に潤一郎出演(『笹沼千代子日記』)。

海老蔵(後の十一代目団十郎)と菊五郎劇団により、歌舞伎座昼の部で、舟橋聖一訳・久保田万太郎演出

・潤一郎監修の『源氏物語』初演。『源氏物語』は、天皇制との関わりで、戦前は舞台化が禁止されていた(『松竹七十年史』)。

※3月には舞台稽古その他で度々上京(2月16日江藤喜美子宛潤一郎書簡438)。

潤一郎は喜代子・喜美子を歌舞伎座の『源氏物語』に招待。大変な大入りで混んでいた。美しかった(『笹

沼千代子日記』)。

3・4

3・7

3・29

3・7

3・7

3・7

3・7

3・7

3・7

3・7

沼千代子日記。

3・8

笹沼喜代子宛潤一郎書簡440。新橋演舞場は4月3日と決定。喜美ちゃんも都合して3人で来て欲しい。20日頃上京の節、1晩御厄介になる。明治座の切符を取っても良い。

3・18

潤一郎は午後2時半から2、3時間、福田屋で客と会う為に、新橋駅へ、2時7分に着く(15日潤一郎の小滝穂宛代筆書簡)。その後(？)、笹沼家を訪問。与野駅まで千代子が迎えに来てくれる。午前1時頃まで、色々面白い話をする(『笹沼千代子日記』)。

3・19

潤一郎は早起きして、喜代子・登代子・喜美子・千代子と10時に家を出、明治座に行く。「天竺徳兵衛」「寺子屋」。潤一郎は芝飯を褒める。銀座のすし仙で夕食。モレナのケーキを笹沼へ土産に持たせる(『笹沼千代子日記』)。

3・25

※『文芸年鑑』昭和27年度版の「上演資料」によれば、出演は勘三郎・芝翫ほか。演目は、第一部が「音菊天竺徳兵衛」「寺子屋」「積恋雪隠扉」。笹沼家では、女中2人を歌舞伎座(源氏物語)へ行かせる(『笹沼千代子日記』)。

4・3

潤一郎は新橋演舞場へ笹沼喜代子らと東おどりを見に行く(3月8日笹沼喜代子宛潤一郎書簡440)。

※『松竹七十年史』によれば、昆の部は「あやめ」「戻り駕」「鳥辺山」「俗曲名所めぐり」。夜の部は「お七吉三」「高砂丹前」久保田万太郎作「旅ゆけば」「文屋と喜撰」「俗曲名所めぐり」。

5・19

潤一郎は、笹沼から御礼の品として、喜代子が見つけた更紗の帯を贈られる(『笹沼千代子日記』)。

6・1

谷崎宅に笹沼宗一郎から電話。ピクターのラジオを2、3日中に届けるとのこと(『笹沼千代子日記』)。

6・3

笹沼宗一郎が、早朝に家を出て、ピクターのラジオを届けに谷崎宅に来る。この時、潤一郎の写真も撮る。熱海(谷崎宅か?)で泊して4日に帰宅する(『笹沼千代子日記』)。

※RCA Victorの最新最高の電番とレコード数種。潤一郎は宗一郎が勧めたメンデルスゾーンの「ピアノトリオNo.1ニ短調ソナタOp.49」(ピアノ)ルビンシュタイン、ヴァイオリンハハイフェッツ、チェロルビヤチゴルスキー)が特に気に入って毎日数回聞いていた。メニューヒンによるメンデルス

ゾーンの「ヴァイオリン・コンチェルト」も大変気に入って日に幾回となく掛けていた。シューベルトのリートも好きだった。ワグナーの「ローエングリン」の結婚行進曲なども良く口ずさんでいた。自分は絵よりも音楽からイマジネーションが湧くタイプだと言っていた(松子「谷崎の趣味」『谷崎潤一郎文庫』月報7)。

※潤一郎はクラシック音楽もよく聞いた。これは笹沼宗一郎が詳しく、潤一郎を導いた。戦後、PXのドーナッツ版から宗一郎を選んで持って行った。一緒に上野の文化会館で「リゴレット」を聞いた事がある。(1996/4/19笹沼千代子さん直話)。

※RCA Victorは宗一郎のものと同じ品で、代金はドル払い。高価だった。宗一郎は音響にうるさく、装置も自分でやった。下落合の家には、防音装置付き25畳の音楽室にアメリカのジムナルシングのラッパを使い、ステレオ雑誌にも載った。五味康祐も、音楽・鉄道・太鼓・川の流れの音を聞きに来た(1996/8/23笹沼千代子さん私信)。

笹沼宗一郎が夜遅くまで掛かって、潤一郎の写真を

6・7

6・21

7・10

7・14

7・15

現像・焼き付けする(『笹沼千代子日記』)。

千代子が手紙と出来あがった写真を潤一郎に送る(『笹沼千代子日記』)。

江藤喜美子宛潤一郎葉書414(ただし全集では25年と誤る)。

潤一郎は喜代子・喜美子・千代子と新橋演舞場へ、六代目三回忌追善興行を見に行く。菊五郎劇団に海老蔵。昼の部「延命院日当・日月星享和政談」「汐汲」「うかれ坊主」。夜の部「ひらがな盛衰記・先陣問答」「怪異談牡丹灯笼」「勢獅子」。松緑がどれも上達している。とても良い。「うかれ坊主」は六代目にはとても及はず。楽しい1日だった(『笹沼千代子日記』・『松竹七十年史』)。

笹沼喜代子・鹿島登代子・江藤喜美子が熱海の潤一郎を訪ね、六代目の三回忌を追福し、書斎で1泊する。この当時、潤一郎は、自宅から少し離れたところにある嘗て奥村土牛が画室に使った家を借りて書斎にしていた(潤一郎「高血圧症の思ひ出」)。

※『笹沼千代子日記』によれば、源之助も同行。

書斎で笹沼喜代子の口三味線で江藤喜美子が「鏡獅子

子」、潤一郎の狂言小唄で松子が「七つになる子」を舞う。喜代子と喜美子の帯に潤一郎が和歌を揮毫する際、激しい眩暈に襲われる。喜代子は絹の夏帯、喜美子は結婚式の時に締めた金通しに長野草風の白緑の青竹の図のあるもの（潤一郎『高血圧症の思ひ出』）。

笹沼千代子が、帝劇ヘメニューヒン・コンサートの映画を見に行き、竹田龍児・鮎子夫妻に邂逅する（『笹沼千代子日記』）。

潤一郎は、新訳『源氏物語』の手助けをしていた玉上琢弥を招待し、自分の定宿である芝明舟町の福田屋の、いつも自分が泊る一番の部屋に泊めた。夜、谷崎も福田屋に泊る。（玉上琢弥『谷崎源氏』をめぐる思い出（上）「大谷女子大国文」第十六号 S 61/3 『松竹七十年史』）

朝、潤一郎は玉上氏を上座に据えて、朝食を共にした。共に歌舞伎座の『源氏物語』を観る（玉上琢弥『『谷崎源氏』をめぐる思い出（中）「大谷女子大国文」第17号』）。

※この後（?）、笹沼千代子の日記によれば、喜代

子と夕食を共にし、歌舞伎座夜の部（?）を見た。10月19日付け江藤喜美子宛書簡454によれば、喜美子も一緒か？

※『松竹七十年史』によれば、10・3、27東京歌舞伎座昼の部で舟橋聖一脚色・久保田万太郎演出・潤一郎監修の改訂増補『源氏物語』「桐壺」（上・下）「夕顔」「若紫」「紅葉賀」「賢木」「須磨明石」上演。夜の部は「寿曾我対面」工藤館「菅原伝授手習鑑」寺子屋「小鍛冶」「三人吉三巴白浪」。出演は猿之助一座・菊五郎劇団・三升・羽左衛門・海老蔵。玉上琢弥、熱海仲田の谷崎邸より夜行で帰洛。潤一郎は玉上琢弥に日本には未だ2台しかないと言って、ピクターのLPをかけて聞かせた（玉上琢弥『谷崎源氏』をめぐる思い出（中）「大谷女子大国文」第17号）。

笹沼宗一郎と千代子が、旧婚旅行に来て、谷崎宅に泊まる。宗一郎が前に届けてくれた外国製ラジオ・ブレイヤーの具合を見て貰い、宗一郎が持参した新しい外国製ドーナッツ版レコードを深夜まで皆で聞いた（1996/8/12笹沼千代子さん私信）。

8・30

10・16

10・17

10・18

10・31

※ドーナッツ版レコードの曲目は、メンデルスゾーンの室内楽で、ピアノ・バイオリン・チェロのトリオ。他の機会に、ハイフェッツ・ビヤティゴルスキー・ルービンシュタインの100万ドル・トリオの曲も差し上げた事がある(1996/8/23笹沼千代子さん私信)。

谷崎宅の庭で宗一郎が写真を4枚撮る。潤一郎・松子は上京。笹沼宗一郎・千代子は途中まで同車し、奥湯河原へ向かう(1996/8/12笹沼千代子さん私信)。

※潤一郎・松子は、新橋演舞場で東おどり終演後、新橋の人たちと夕飯に招かれる(10月19日江藤喜美子宛潤一郎書簡454)。

潤一郎は、江藤喜美子と新橋演舞場の東おどり昼の部(3時前に終演)を観た後、三越劇場へ名演技と評判の滝沢修の『炎の人』(5時半開演)を見に行く(10月19日、24日江藤喜美子宛潤一郎書簡454、5)。  
 ※『文芸年鑑』昭和27年度版によれば、第一部「今様小鍛冶」・吉井勇作「光琳屏風」「秋色旅歴」。第二部「二人猩々」「三社祭」吉川英治作「新平家物語」

一語「お好み番附」。

◆昭和二十七年◆(1952)潤一郎67歳

喜代子が福田屋へ潤一郎を訪ねる(『笹沼千代子日記』)。

潤一郎上京(1月12日浜本浩宛潤一郎書簡459)。夜、歌舞伎座を観る(1月13日江藤喜美子宛潤一郎書簡460)。

※吉右衛門劇団・猿之助一座・三津五郎・時蔵・羽左衛門。夜の部は「花上野菅碑」「蓮獅子」「松浦の太鼓」「廓文章」(『松竹七十年史』)。

※『笹沼千代子日記』によれば、喜代子・喜美子と一緒。

潤一郎、新橋演舞場、昼の部を観る(1月13日江藤喜美子宛潤一郎書簡460)。

※菊五郎劇団に海老蔵・権十郎で「青砥橋花紅彩画」「雪の道成寺」(『松竹七十年史』)。

笹沼家が潤一郎へ礼状を出す(『笹沼千代子日記』)。  
 京都の潤一郎から笹沼家に、熱海へ行くと電話(『笹沼千代子日記』)。

3 · 17

3 · 15

2 · 25

1 · 24

1 · 23

1 · 10

は不明だが、宗一郎が会社の帰りに谷崎宅へ寄って、ラジオを直した(『笹沼千代子日記』及び1996/8/17千代子さん私信)。

潤一郎は喜代子・宗一郎・千代子と一緒に、帝劇でエノケンの「浮かれ源氏」を見る。笠置しづ子が上手だが、面白くはない(『笹沼千代子日記』)。

※潤一郎は舞台裏でエノケンと二、三十分話をした(潤一郎『雪後庵夜話』)。

※帝国劇場で3・14・17第4回帝劇ミュージカルス「浮かれ源氏」上演。『篤姫』のパロディー。

出演は榎本健一・筑紫まり・笠置シズ子・三木のり

平・上山草人・澄川久(橋弘一郎)『谷崎潤一郎先生著書総目録』・『帝劇の五十年』・秦豊吉『日劇シヨウより帝劇ミュージカルスまで』。

※潤一郎は、上山草人が出演できるように尽力した

(三田直子「谷崎潤一郎先生と松子夫人」S33/1  
「主婦の友」) 4・4

※上山草人を使って貰うことになって、帝劇の事務所であつたのが、秦豊吉に会った最後(潤一郎『秦豊吉君のこと』)。

※秦豊吉は帝劇社長。昭和31年7月5日死去。

笹沼源之助・喜代子夫妻と宗一郎・喜美子が熱海へ潤一郎を訪ねて来る。宗一郎が潤一郎・松子・重子・恵美子らの写真をカラーや白黒で沢山写す。夜、西山の重箱で一同会食(潤一郎『高血圧症の思ひ出』)。

※写真あり。千代子は東一がまだ幼く、同居していた喜美子の子供も、外泊の場合は預かる必要があつたので、行かなかつた(1996/8/23笹沼千代子さん私信)。

笹沼家帰宅。潤一郎からお土産として、千代子にハンカチ、子供達(江藤登美子と笹沼登喜子)にカバン、そして美味しい羊羹。この日、熱海で写した写真を現像。とても良く撮れている(『笹沼千代子日記』)。

潤一郎は松子・重子と新橋演舞場の春のをどり屋の部「新羽衣」「保名」「二人道成寺」などを見に行く。新橋駅到着直前に異常が生じる。虎の門福田屋で小憩。笹沼一家と菊村に会う約束があるので、無理をして出掛ける。新橋倶楽部で昼食。遠藤為春・山口



久吉が挨拶に来る。笹沼喜代子・登代子・喜美子らと共に、福田屋に戻って夕食後、森田紀三郎・江藤義成が駆け付ける。12日まで、福田屋の2階座敷で仰臥。この間、森田紀三郎・江藤義成の診察、笹沼夫妻・宗一郎夫妻・登代子・江藤夫妻などの見舞いをたびたび受ける。『源氏物語』の新訳は「玉鬘」のあたりまで進行中で、中央公論社の滝沢が校正刷りを持参。京都の平安神宮の花見を初めて欠かず(潤一郎『高血圧症の思ひ出』)。

※右半身が多少不自由になり、29年秋まで寝たり起きたりの生活が続く(潤一郎『台所太平記』)。

※『松竹七十年史』によれば、昼の部は「新羽衣」

「深山桜及兼枝振」「東姿二人道成寺」「俗曲東都芸者図絵」。

※4日の『笹沼千代子日記』によれば、まり千代が御所の五郎蔵を演じた。

笹沼千代子が、笹沼東一の誕生日のお祝いの赤飯と、先日熱海で撮った写真を潤一郎に届ける(『笹沼千代子日記』)。

江藤義成・喜代子・喜美子・宗一郎・千代子が、福

4・10

4・11

4・13

田屋へ潤一郎を見舞いに来る(『笹沼千代子日記』)。  
※千代子は、与野から日本橋三橋堂に寄って、和菓子を買ってから。宗一郎は、ライファン本社(日本橋兜町日証ビル)から(1996/8/23笹沼千代子さん私信)。

前日朝に行方不明となった日本航空もく星号が、発見され、全員無事と朝刊各紙が報じる。しかし、実際には全員死亡。乗客の中に、漫談家・大辻司郎が含まれていた。

※大辻司郎は、帝国ホテル演芸場に古川ロッパと一緒によく出ていたので、潤一郎とも親しかった(『笹沼千代子日記』及び1996/8/17千代子さん私信)。

潤一郎は喜代子・千代子と、新橋演舞場で山本安英の「夕鶴」を見る(『笹沼千代子日記』)。

※『松竹七十年史』によれば、4月10日から19日まで。夜のみ。

森田紀三郎が付き添って、潤一郎は熱海に帰る(潤一郎『高血圧症の思ひ出』)。

※笹沼家で潤一郎の写真を「四ツ」に引き延ばして

送った(『笹沼千代子日記』)。  
笹沼宗一郎が、潤一郎から頼まれたラジオを、アメリカ進駐軍P XのWilliamに頼む(『笹沼千代子日記』)。

夕、笹沼喜代子宛潤一郎書簡465。宗ちゃん(宗一郎)幻燈の機械持参で皆々大喜び。もう一度太陽光線で取って頂ければ幻燈の機械を買ってもよいなどと申し居り候。左団次には手紙と短冊「ほととぎす声のかぎりをきかまほしおのが車月の時し来ぬれば」を持たせ、小滝樞秘書に、23日楽屋へ届けさせる。

※5・3〜6・26歌舞伎座で三代目市川左団次襲名披露興行。昼の部(6・1)夜の部)で舟橋聖一脚色・久保田万太郎演出・潤一郎監修・池田亀鑑講修の『源氏物語』「総合」〜「篝火」上演(『松竹七十年史』)。

潤一郎にタイプライターを頼まれ、夕方、宗一郎と千代子が福田屋へ届ける。宗一郎が使い方を教える

(『笹沼千代子日記』)。

※ラジオ・タイプライター・カメラ・プレイヤーなど、何れも宗一郎の趣味で、自分が使って良かった

ものを潤一郎に勧めていた(1996/8/17笹沼千代子さん私信)。

潤一郎は朝から体調に異変、欄間に掛けてあった伊藤博文の額の文字がはつきり読めなくなっていた。終日安静。この後、耳下腺炎が2、3日・三叉神経痛が1週間以上・記憶の空白が約10日間など、障害が次々に起こり、沼津の飯塚直彦博士の診察を受ける。笹沼夫人・登代子・喜代子の見舞いを受ける。8(7?)月21日まで病床にある。その後も2、3年間激しい眩暈が続き、昭和34年になっても完治していない(潤一郎『高血圧症の思ひ出』)。

※この日は、笹沼喜代子・宗一郎・千代子・登喜子・東一・鹿島登代子・長次(長男)・江藤喜美子・登美子(長女)・美代子(次女)・借楽園の女中2人で訪問。東京駅7時発で、第一ホテルで食事。午後、谷崎宅を訪問。伊藤氏の別荘に泊まった。子供達は先に女中と帰して、夜12時まで谷崎宅で過ごした(『笹沼千代子日記』及び1996/8/7、12、17千代子さん私信)。

笹沼一家は、ワ二園などを見て、夜8時半の汽車で

— 帰った(『笹沼千代子日記』)。

◆昭和二十八年◆(1953) 潤一郎68歳

潤一郎の『アルペンフレックス推薦文』が「アサヒ・カメラ」に掲載される。〈今度私の知人が関係している八陽光学で新製作品アルペンフレックスを世に出すに当つて推薦文を求められた〉とある。

※この《知人》は笹沼宗一郎かどうか不明。ただ、カメラのこと・音楽のことは、笹沼宗一郎によく電話で訊いていた。そして、宗一郎が潤一郎の希望を聞いて、高級品を届けていた(1996/8/7 笹沼千代子さん私信)。

5・21

潤一郎は熱海仲田の雪後庵を売却。以後、約1年間は、再び山王ホテル内土屋別荘を借りる。

6

角川書店の『昭和文学全集』第15巻「谷崎潤一郎集」月報15号に笹沼源之助の「わが友谷崎を語る——小学校から大学まで——」掲載。

8・6

笹沼喜代子が子宮癌手術のため、慶応病院に入院(『笹沼千代子日記』)。

※手術して事なきを得る(潤一郎『撫山翁しのぶ草』の巻尾に)。

8・19

笹沼喜代子が慶応病院を退院(『笹沼千代子日記』)。

千代子日記)。

9・20

江藤きみ子宛潤一郎書簡486。茂山千五郎『細雪』狂言小唄の会(大蔵会)への招待。お喜代さんに見て頂けないのが残念。11月には菊村が一中節に作曲、あづま踊りの後、演舞場へ出す。京都から弥寿榮はつ子義子、新橋も一流の人々が出る。振付は井上八千代。これはお喜代さんにも見て頂けはしないか。その日八千代さんが『蓬生』を舞います。

※茂山千之丞『狂言役者——ひねくれ半代記』によれば、十一世茂山千五郎の還暦祝の会のために谷崎に狂言小歌の作詞を頼み、『ささめ雪』が出来た。

千之丞の節付け、千五郎の型付け、昭和二十七年六月七日、千五郎狂言小謡・小舞公演で発表。のち、一中節と井上流の京舞が付いて、『花の段』となる。

※新橋菊村の篠原治(都一春)は『花の段』の作曲で芸術院奨励賞を受賞した(伊吹和子『われよりほかに』6-11)。

潤一郎の江藤喜美子宛代筆書簡494。「京舞の会」26

11・11

日昇『蓬生』2枚、27日夜『花の段』3枚入手。

東京新橋演舞場で第8回文部省芸術祭参加井上流「京舞の会」第2回東京公演。

※東京新橋演舞場「京舞」に潤一郎の『八千代さんのことなど』掲載。

※『蓬生』を井上佐多女が舞う。都一春(篠原治)作曲、4世井上八千代振付けの『花の段』を、松子のデザインによる衣裳で奥山はつ子・水口照葉・吉岡義子が舞う。その後、「東をどり」で西川鯉三郎の振付けで、まり千代・小くに・染福が踊った(京都新聞編集局編『京舞』S35/4淡交新社刊・津島寿一『芳壇随想』④「舞踊」に細評あり)。

※潤一郎の『八千代さんのことなど』によれば、潤一郎はこれ以前に、『蓬生』の舞は見ている。都一春(篠原治)作曲の一中節『花の段』は、昨今毎日レコードで聴いて楽しんでゐる、とある。

潤一郎・松子・恵美子、喜代子・登代子・喜美子・千代子で、新橋演舞場の井上流「京舞の会」を見る。夕食は「ばん太」でカツレツ(『笹沼千代子日記』)。

※恐らく26日昼は見ず、27日夜の部だけを見たので

11・30

12・28

◆昭和二十九年◆  
4・1

あろう。

※『蓬生』は、井上流が初めて東京へ進出する為に、松本佐多女から依頼され、潤一郎が『源氏物語』『蓬生』の巻から作詞したものだだったが、東京での京舞の会は見られなかった。さだ女は2度も潺湲亭に来て舞って見せ、歌詞の誤りがないか潤一郎に質した。ふり付けはさだ女、作曲は富崎春昇だった(松子『倚松庵の夢』『銀の盞』。ただし、第1回東京公演と誤る)。

喜代子、再入院(『笹沼千代子日記』)。

※当時は病院の食事がひどかったので、千代子さんは子供の雑用と、病院へ食事を毎日交代で運ぶのに忙しかった。

笹沼源之助・宗一郎が熱海谷崎宅を訪問。恐らく、喜代子の病状報告(『笹沼千代子日記』及び1996/8/17千代子さん私信)。

◆昭和二十九年◆(1954)潤一郎69歳

潤一郎は、山王ホテル内土屋別荘から熱海市伊豆山鳴沢1135番地の別荘「後の雪後庵」に移る(対談「文芸訪問2」・潤一郎『老後の春』)。

6・21	萩原英一危篤。夜9時40分死去(『笹沼千代子日記』)。	12・14	『幼少時代』「書簡集」に、この日付の笹沼源之助の潤一郎宛書簡あり。
6・22	通夜。借案園の料理を千代子と喜美子で作り、届ける。潤一郎は来なかった(『笹沼千代子日記』)。	◆昭和三十年◆(1955)潤一郎70歳	
6・24	信濃町の自宅で葬儀。潤一郎は来なかった(『笹沼千代子日記』)。	1・27	笹沼源之助・喜代子夫妻と喜美子が来て、谷崎宅に泊る(『笹沼千代子日記』)。
7・11	江藤喜美子宛潤一郎葉書307。来月にでも1度東京へ出たい、お母さんを連れて、今度の新宅を見に来ませんか、24日と8月上旬、ラジオで芥川龍之介の事を放送、プウさんの事も出て来ます。	1・28	笹沼千代子の子供達へのお土産を沢山持たせて帰す。千代子にはモヘアのショール(『笹沼千代子日記』)。
7・13	鹿島次郎・登代子宛潤一郎書簡508。御父上長逝お悔やみ。	3・9	日比谷公会堂でオイストラフのバイオリン独奏会。バガニーニ・フランクのソナタ。潤一郎・松子・恵美子・竹田鮎子で聞きに行く。笹沼宗一郎と千代子に逢う(『笹沼千代子日記』)。
7・21	※鹿島次郎・登代子宛潤一郎書簡全3通のうち最初のもの。宛先は埼玉県浦和市領家30。		※松子「谷崎の趣味」(『谷崎潤一郎文庫』月報7)では、ラローの「スペイン交響曲」だったという。
10・1	笹沼宗一郎が、泉屋のビスケットを買って、福田屋の潤一郎を訪ねる(『笹沼千代子日記』)。	3・13	潤一郎・松子・喜代子・登代子・喜美子で芝居。歌右衛門・勘三郎(『笹沼千代子日記』)。
12・13	小滝穆が、潤一郎の事で笹沼家を訪問(『笹沼千代子日記』)。	3・28	潤一郎は、笹沼宗一郎・千代子と一緒に園田高弘のピアノ・リサイタルを聞きにサンケイホールへ行く。一緒に福田屋へ帰る。潤一郎はとても元氣。テレビ出演を承諾したと言う(『笹沼千代子日記』)。

※『幼少時代』関連か?  
 夜、潤一郎は、『幼少時代』に関連して、笹沼源之助に電話で質問した(14日笹沼書簡)。

※11月23日にNHKテレビから放映された佐佐木茂索との対談「谷崎潤一郎夜話」のことであろう。

潤一郎が笹沼千代子の所へ送った猫2匹者。名前はアタとミー（『笹沼千代子日記』）。

10・10

※谷崎家の猫アタとミーの子供。登喜子が動物好きで、谷崎家の猫とよく遊んだ。潤一郎が「登喜子ちゃん、仔猫あげよう」と言うと、登喜子が「うちはおばあちゃまが猫も犬も大嫌いだから駄目なの」と答えて、後で喜代子が登喜子を叱っていた事があった。アタとミーは、翌日、鹿島登代子宅へ連れて行った。その後、どうなったかは不明（1997/2/12 笹沼千代子さん私信）。

10

朝から猫と子供達は大喜びで遊ぶ。後に鹿島宅へ連れて行く（『笹沼千代子日記』）。

潤一郎は『過酸化マンガン水の夢』を執筆（『十月稿』とあるが、疑問）。

11・6

※8月25日付け嶋中鵬二宛潤一郎速達536に、来月初旬から70年記念号（S 30/11）の原稿（『過酸化マンガン水の夢』）にかかり、24、5日頃までに脱稿のつもり、とある。

※毎日、笹沼宗一郎の所に電話をかけて相談したと言う（稲沢秀夫『秘本谷崎潤一郎』3-112）。

笹沼千代子の恩師で雙葉学園（雙葉高女）の国語の女性教師・三浦某のために潤一郎が歌を短冊に書く。千代子が雙葉へ届け、喜ばれる（『笹沼千代子日記』）。

中頃に、潤一郎は新年号用『鍵』第1回分30枚を中央公論社に渡す（『週刊朝日』S 31/4/29所載、嶋中鵬二と「週刊朝日」記者との一問一答）。

※『鍵』のボラロイドについては、笹沼宗一郎に尋ねた（稲沢秀夫『秘本谷崎潤一郎』3-112）。

※毎日のように電話があり、宗一郎がカメラを見せて福田屋へ持って行って、写し方などを教えた（1998/8/13 笹沼千代子さん私信）。

福田屋に千代子が潤一郎を訪ねて来る。NHKテレビの為（『笹沼千代子日記』）。

※佐佐木茂索との対談「谷崎潤一郎夜話」のため、NHKテレビの放送室に行った（8日長尾伴七宛松子書簡）。

※笹沼千代子さんが福田屋へ迎えに行き、一緒に車

でNHKに行った。帰りも一緒に福田屋まで行った  
(1997/2/12笹沼千代子さん私信)。

※潤一郎は、出演前にドーランを塗って貰うのが好きだと言っていた(1996/4/19笹沼千代子さん直話)。

※控え室で、係りの人から笹沼千代子を通じて「アップルパイとチーズケーキとどちらが宜しいでしょうか?」と訊かれて、「両方」と答えたが、割に大きなケーキだったので、結局、片方しか食べなかった。対談の中で、佐佐木茂索が「谷崎先生は、東京の女性より関西の女性の方がお好きでいらっしゃいますね」と言った時、潤一郎は、付き添いですぐ近くにいた笹沼千代子に氣を使ったのか、答えなかった(1997/2/27笹沼千代子さん私信)。

夜9時15分からNHKテレビで佐佐木茂索との対談「谷崎潤一郎夜話」放映。

この日印刷の昭和31年1月「文芸」グラフィア「幼な友達」に、芝明舟町福田屋で撮影した潤一郎・笹沼源之助の写真と、笹沼源之助の文章が掲載される。

## ◆昭和三十一年◆(1956)潤一郎71歳

2・11

潤一郎が揮毫した「夢」という字を羽二重の帯に染めるために、登代子・喜美子・千代子で銀座の呉服屋・山田屋へ頼みに行く(『笹沼千代子日記』)。

※笹沼源之助の父・源吾の五十回忌の為(1997/2/12笹沼千代子さん私信)。

「文芸臨時増刊 谷崎潤一郎読本」に笹沼源之助の「子供の時分の谷崎」掲載。

笹沼源之助の父・源吾の五十回忌に浅草永見寺で行われた法事に松子とともに出席し、花岡芳夫と共にスピーチをした後、帝国ホテルでの会にも出席した(『撫山翁しのぶ草』に記念写真あり)。

笹沼千代子宛潤一郎書簡54。登喜子ちゃん森村学園入学お目出とう。喜美子ちゃんに今月は多忙で芝居は観に行かれないと御伝え下さい。

潤一郎が笹沼千代子に電話。4月3日と4日に子供達と皆で熱海に来よう誘う(『笹沼千代子日記』)。

十返隆編『少年少女日本文学選集13谷崎潤一郎名作集』(あかね書房)にサインして、笹沼登喜子と東一にプレゼントした(1997/3/1笹沼千代子

さん私信)。

4・3

笹沼源之助・喜代子・千代子・登喜子・東一・江藤喜美子・登美子・美代子・鹿島登代子・登志・長次が、東京駅で北浜の御寿司を買って、午前9時21分の汽車に乗り、熱海に向かう。借菜園の女中に会う。夕方、谷崎宅で夕食。夜、10時頃まで谷崎宅で過ごす。子供達は、女中と旅館に早く帰す(『笹沼千代子日記』)。

5・13

4・4

熱海銀座を散歩。谷崎宅で、子供達、猫と遊ぶ。アイスクリーム・菓子等を出す。夕方7時4分の汽車で帰宅(『笹沼千代子日記』)。

5・14

5

潤一郎は『幼少時代はしがき』を京都下鴨湯淺亭に於いて執筆。81歳になる叔父(『長谷川清三郎』)と8つ上の従姉(『きく』)と(『幼稚園以来今日まで兄弟以上に親しくしてゐる竹馬の友』(『笹沼源之助』)の助力がなかったらこの書は出来なかったかも知れない、と記す。

5・15

5・11

笹沼宗一郎・千代子・鹿島登代子・江藤喜美子、午前9時のつばめ特2食堂車帝國ホテル4時20分京都着。夕食は京都アラスカで潤一郎が御馳走する(『笹

沼千代子日記』)。

笹沼夫妻・登代子・喜美子は朝6時起床(旅館ふじちか)。清水寺・知恩院・八坂神社・三十三間堂・醍醐寺。江藤哲夫加わる。宇治川渡り平等院・興聖寺。夜は谷崎宅でたん熊の出前を御馳走する。楽しい夜(『笹沼千代子日記』)。

笹沼夫妻・江藤夫妻・登代子は奈良へ。三月堂・二月堂・東大寺大仏殿・博物館・新薬師寺・奥山ドライブ・猿沢の池。奈良泊まり(『笹沼千代子日記』)。

笹沼夫妻・江藤夫妻・登代子は、春日神社・浄瑠璃寺・三重塔・法隆寺博物館・慈光院・唐招提寺の千手観音・秋篠寺・法華寺(安産)を廻る(『笹沼千代子日記』)。

笹沼夫妻・江藤夫妻・登代子と一日潤一郎も行動を共にする。南禅寺・平安神宮・詩仙堂・葵祭を廻り、いづうの饅寿司を食べ、仁和寺・広隆寺を見て、嵐山で舟に乗り、夕食は吉兆(『笹沼千代子日記』)。

※葵祭は、潤一郎が特別に良い席を取ったので、一般よりもずっと神社の奥で見られた(1997/2 12 笹沼千代子さん私信)。



5・16

笹沼夫妻・江藤夫妻・登代子は金閣寺・大徳寺真珠庵・竜安寺・落柿舎・天竜寺(昼食)・西芳寺。谷崎宅で井上八千代の地唄舞を見せ、夕食を共にする

(『笹沼千代子日記』)。

5・17

笹沼夫妻・江藤夫妻・登代子は清水寺・三千院・寂光院、大津を眺め、坂本より延暦寺、三井寺でお団子を食へ、石山寺、京都へ帰り、二条城・二条陣屋、アラスカで夕食、寝台車で東京へ(『笹沼千代子日記』)。  
笹沼千代子、潤一郎に礼状を書く(『笹沼千代子日記』)。

5・21

(年月推定) 鹿島登代子宛書簡547。長ちゃんにもこの本(潤一郎新訳『源氏物語』第一巻)を差上げようと思うが長治の治はこの字でよいのですか。プウさん今年は70のお祝をされることと思いますが、誕生日は何時でしたか。

※正しくは鹿島長次。鹿島次郎の長男だから(1998/10/8 笹沼千代子さん私信)。

5・29

京都で潤一郎が笹沼千代子に紹介したつづれやの店から、つづれの帯が小包で届く(『笹沼千代子日記』)。  
午後4時、ライファンにて、笹沼源之助の古稀を祝

10・6

い、寿像除幕式。登喜子が除幕の紐を引いた。夜は会社で祝賀会(『笹沼千代子日記』)。

※笹沼源之助の誕生日8月31日は夏休みなので祝いはしをした。笹沼源之助が自ら作って潤一郎が題

字「笹沼源之助翁寿像 潤一郎」を書いた寿像を会社

社に飾り、盛大に行われた。潤一郎や友人は招待され

れなかった。潤一郎は、「な、そ路の峠をこえて雙

鏢と撫山の翁らいふあんを売る 祝 笹沼君古稀

潤一郎」と扇面に揮毫して贈った。この歌を朱色の

縮緬に染め、配りものとした(1997/2/12 笹

沼千代子さん私信・『撫山翁しのお草』写真及び高

橋孝作「畏友故笹沼学兄を偲ぶ」。

※縮緬の風呂敷は高島屋に1000枚注文、前日から

会社の人たちに配った。足りなくなつて、10月11

日に追加注文を出した(1997/2/27 笹沼千代

子さん私信)。

潤一郎は潺湲亭を出、以後、熱海伊豆山の後の雪後

庵を本宅とする(稲沢秀夫『聞書谷崎潤一郎』<sup>P202</sup>)。

潤一郎は東京で笹沼夫妻と会う(17日鹿島登代子宛

潤一郎書簡556)。

12・14?  
(15?)

12・8

12・14?

(15?)

◆昭和三十三年◆(1957) 潤一郎72歳

2・14 潤一郎、帝国ホテルに宿泊(『笹沼千代子日記』)。  
2・15 笹沼千代子が帝国ホテルへ電話して、何時頃与野に

いらっしゃるか、犬丸一郎に訊く。午後、谷崎殿下が笹沼家を訪ねる。皆とてもそわそわしてお待ちかね。鯛の兜煮と初午の赤飯。皆で写真を撮る。9時

2・16

5・29

(写真4) 昭和32年、与野下落合笹沼宅にて。  
備菜園の料理を食べる谷崎潤一郎

半まで話をして、帝国ホテルへ帰る(『笹沼千代子日記』)。

※笹沼家アルバムにこの時の写真(写真4)あり。

潤一郎は東横ホールで菊五郎劇団を見る。左団次・福助の累。なかなか好い、と潤一郎は上機嫌。松子

・重子は遅く来る。食事は銀座で日本料理(誤作?)。魚のフライ。熱海へ帰る(『笹沼千代子日記』)。

※『松竹七十年史』によれば、昼の部で「車引」「寺子屋」「色彩間豆」「チェーホフ」「犬」。

午後、潤一郎は笹沼千代子とストリップに行く(『笹沼千代子日記』)。

※日劇ミュージックホールなら「そよ風さんお耳を揃いて頂戴」で、伊吹まり代・代々木あき子らが出演。23日初日(「内外タイムス」23日4面)。この日の「内外タイムス」4面に解説記事あり。ジプシー・ローズが2ヶ月ぶりに復帰出演。新婦朝の芦原英了が、ゴールデン・プログラムとして演出する新感覚ヌード・ショー。これ以降、日劇ミュージックホールへはしばしば千代子と行っている。

※潤一郎が福田屋から車で笹沼千代子らと一緒に行く

と、必ず丸尾長頭が日劇小劇場の小さい入り口まで出

8・10

迎えて案内してくれた。丸尾長頭は、日劇小劇場の案内状を、毎回、潤一郎に送っていた。潤一郎は春川ますみが特に頼みだった。ストリップはかぶりつきで見た。千代子を持たせて置いて、ストリップバーに会いに行つて触ってくるよ、と楽屋へ螺旋階段を登つて行った。

8・11

千代子は、心臓麻痺を起こさないでよ、と言つた。潤一郎は嬉しいとよだれを垂らした。御飯の時もそうだった。潤一郎は、ストリップ・映画・芝居などへは、余り松子を連れて行かなかつた(1996/9/19 笹沼千代子さん直話及び1997/5/25 千代子さん私信)。

上野美術館で開催された創型会に笹沼源之助が谷崎像を出品しているので、笹沼一家は見に行き、精養軒で食事(『笹沼千代子日記』)。

7・7

※この像は潤一郎の気に入らなかつたので、贈呈するつもりだったのが取り止めになつた(1997/2/15 笹沼千代子さん私信)。

※現在、芦屋市谷崎記念館にある。

8・12

潤一郎は千萬子らと日光へ出立(7月24日千萬子宛潤一郎書簡)。

8・7?

(8?)

谷崎殿下がいらつしやるので掃除などで大忙し。夜、登代子・江藤哲夫着(『笹沼千代子日記』)。

午後、潤一郎・松子・恵美子・千萬子・たをりが日光から塩原に着く。笹沼別荘で一休みして、明賀屋(笹沼別荘から歩いて3分の日本旅館)へ入る。夜は、揃つて笹沼別荘で食事。午前中に笹沼千代子と江藤喜美子が作つた偕楽園の支那料理。月が美しい(『笹沼千代子日記』)。

※笹沼家アルバムに写真(写真5)あり。笹沼源之助・喜代子・潤一郎・松子・刀根さと・鹿島登代子・江藤喜美子・笹沼千代子・渡辺千萬子・谷崎忠美子・渡辺重子(新潮日本文学アルバムに掲載)。2階の写真は多分この日撮影したもの(1997/2/15 笹沼千代子さん私信)。重子も来た。無口で静かな人。潤一郎は重子はなかなか利口だと言つていた(1997/2/27 笹沼千代子さん私信)。

午前中、車で全員で妙雲寺・逆杉・八幡様へ。昼は笹沼別荘で日本蕎麦。たをりも東一たちと川へ入つて水浴び。東一がたをりをタオルちゃんと呼ぶ。スナップ写真を撮る(『笹沼千代子日記』)。

朝から一家で笹沼別荘に行く。昼は蕎麦。たをり・東一たちは川に入って大喜び。お弁当を6つ作って

11・7

朝、笹沼別荘から中華料理が明賀屋へ届けられる。皆で潮ノ湯へ行く。紅葉ヶ丘公園を散歩。夜は潤一郎だけ笹沼別荘で夕食。鮎・黄金球など。夜10時過ぎまで話は尽きず。明賀屋まで送られて帰る(『笹沼千代子日記』)。

11・3

8・18



(写真5) 昭和32年8月、塩原の笹沼別荘にて。  
前列左より笹沼源之助・笹沼喜代子・谷崎潤一郎・松子。  
後列左より刀根さと・鹿島登代子・江藤喜美子・笹沼千代子・渡辺千萬子・谷崎恵美子・渡辺重子

貰い、明賀屋へ届けて貰う。夕方5時、車で東京へ向かう(『笹沼千代子日記』)。

塩原温泉別荘笹沼喜代子宛潤一郎書簡568。先日は大勢で参上。本日、千萬子とたをりは帰洛。松子は恵美子を連れて、今日中に上京1泊、19日朝から2、3日軽井沢へ行く。熱海は重子と潤一郎だけ。松子の留守に家中で一番美人の女中を連れて上京、映画でも見て歩こうかと思っています。宮本さんに上げる歌2首、不出来ながら短冊に書きましたから明日発送いたします。歌は《七絃の滝のほとりに年を経たおうなの白髪いよゝ長かれ》《七絃の滝のひゞきを友として八十路の響声もさやけし》。

※宮本家は塩原温泉妙雲寺門前にあった(市居義彬『谷崎潤一郎和歌集』)。

※家集では「夏塩原宮本家にて／七絃の滝のほとりに年をへておうなの白髪いよゝ丈ながし」。

笹沼源之助藍綬褒章受章。

潤一郎は歌舞伎座夜の部『盲目物語』・木村富子原作『黒塚』を一家で見に行く。隣の柝席に笹沼喜代子・喜美子・千代子。虎の門福田屋まで送って貰う

『笹沼千代子日記』。

※『松竹七十年史』によれば、芸術祭参加興行。

潤一郎は新橋演舞場の秋の東をどり夜の部『母を恋ふる記』に、笹沼喜代子・喜美子・千代子を招待する。千代子は東一の病気で欠席(『笹沼千代子日記』)。

藍綬褒章授与式のため、笹沼源之助・喜代子夫妻、午前7時半に埼玉県庁へ(『笹沼千代子日記』)。

ライファン工場で祝賀宴会。150人(1997/2/27 笹沼千代子さん私信)。

帝国ホテルで行われた笹沼源之助の藍綬褒章祝賀会

に潤一郎が出席。他に、君島一郎・後藤大洋漁業社長・犬丸徹三ら300人。笹沼家に写真あり(1997/2/27 笹沼千代子さん私信)。

潤一郎は福田屋で、藍綬褒章を着けた笹沼源之助と並んで、文化勲章を着けて、宗一郎に記念写真を撮

って貰う(『笹沼千代子日記』から推定。『撫山翁しのお草』グラビアに写真あり)。

午後、潤一郎は笹沼千代子と一緒に日劇ミュージック・ホールのストリップショー「シスター・ボーイ」を見る。虎の門の福田屋で食事。熱海へ帰る(『笹

沼千代子日記』。

※題名は「メケメケよろめけ」。「内外タイムス」11月14日4面下段広告によれば、11・14・12・28。「内外タイムス」12月12日4面に記事あり。

潤一郎が笹沼千代子を東横ホールの若手歌舞伎に招待(『笹沼千代子日記』)。潤一郎も一緒に見たと思う(1997/2/27 笹沼千代子さん私信)。

※『松竹七十年史』によれば、「開場三周年記念顔見世若手歌舞伎」。出演は勘弥・高麗蔵・菊蔵・団子・沢村訥升・我童○権十郎・八十助・由次郎・大輔・源之助・段四郎一座。昼の部は「本朝二十四孝・十種香」「太刀盗人」「敵討鑑襖錦」「江戸育お祭佐七」、夜の部は「連獅子」「菅原伝授手習鑑・寺子屋」「勸進帳」「雪暮夜入谷畦道」。

◆昭和三十三年◆(1958) 潤一郎73歳

※この年(戊戌)に押巻した(『撫山荘』戊戌新春潤一郎)という書額がある。笹沼家アルバムに写真(写真6)あり。

川崎市並木18佐竹氏方稲葉ちよ宛書簡582。笹沼・峯岸と3人で参上します。

※この年、潤一郎・笹沼源之助・峯岸鎮治・杉浦貞二で稲葉清吉先生の未亡人・千代夫人を囲む会を開いた（NHKテレビ「ここに鐘は鳴る」）。

笹沼千代子宛書簡<sup>58</sup>。東一君にネクタイを贈る約束をしたのでヤングエーヂに買いに行ったが品切れ。取り敢えず1つだけ送る。

※ヤングエイジは神戸にあり、お子様洋服用品専門のハイカラな店。関西では有名だった。潤一郎は東一のために、わざわざヤングエイジまで行った。余り良いのがなかったからと、初めネクタイを1本だけ送り、また後で1本送った。東一は大喜びで、小学2年頃まで大切にしていた（1997/2/27笹沼千代子

(写真6)《撫山荘》書額

2・8	4・4	6・23	7・17	7・22
-----	-----	------	------	------

さん私信)。

※ただし、この時は銀座のヤングエイジに行ったと推定される(細江説)。

潤一郎が送ったヤングエイジの可愛いネクタイ2本が笹沼家に届く。千代子がお礼状を出す(『笹沼千代子日記』)。

笹沼喜代子・喜美子・千代子・子供4人が熱海に来る。ワニ園で遊び、ホテルに行き、午後、谷崎邸に来る。子供達はコリー犬と遊ぶ。一緒に夕食。帰宅後、千代子がお礼状を書く(『笹沼千代子日記』)。

夕方、潤一郎は与野の笹沼家へ行く。夕食、鯛の活作り・鰻。8時半、与野を出、熱海へ(『笹沼千代子日記』)。

「銀座百点」8月号のために潤一郎が淡路恵子と対談「緑陰に語る」を行う。

※この対談は、淡路恵子と会いたいという潤一郎の希望を叶える為に、保坂幸治氏あたりが企画したものである(1997/3/1笹沼千代子さん私信)。

午後、潤一郎は与野の笹沼家へ行く。台風が近付い

ているので心配する。夕食後、淡路恵子の話をする。  
8時過ぎに帰る（『笹沼千代子日記』）。

※対談の日、淡路恵子はお腹が空いていて、重箱の饅を取ったら、物凄くよく食べた、タバコを吸う手つきがとても良かった、和服も上品ではないが、一寸いいんだ、などと潤一郎は語った。また、「淡路恵子はピンポーン・ダナオと仲がとでも良さそうだが、あの2人は何かある、仲良く見せているのだ、いずれ別れる」と予言していた（1997/3/1、5/25笹沼千代子さん私信）。

中央公論社の新書版『谷崎潤一郎全集』第5巻月報第17号に笹沼源之助の「神童谷崎」掲載。

虎の門福田屋に、登代子・喜美子・千代子が潤一郎を訪ねて来る。一緒に日劇のストリップへ行く。お茶を飲んで、別れ、福田屋に帰る（『笹沼千代子日記』）。

※題名は「夜ごと日ごとの感」。「内外タイムス」11月1日3面に広告。

朝、潤一郎は福田屋より電話、「手が震え、血圧190」箱書きは書いてあるが、与野には行けず、祝品（鉄

斎の袱紗）をしいの人に届けさせる、と伝える（『笹沼千代子日記』）。

※止宿先の虎の門の福田屋で笹沼源之助の金婚式の御祝いの袱紗の箱に揮毫中、右手に麻痺が起る。10日ほど同家で安静にして熱海に帰る。3カ月の静養を医師から忠告される。以後右手に疼痛を覚え、執筆が不自由となる（全集年譜・「朝日新聞」昭和34年10月16日「谷崎潤一郎氏の近況」）。

※松子の「初音を聞かずして」（『太陽』S51/4）によれば、当日、潤一郎の血圧は二百以上だったのだ、松子が止めたが、死んでも恩人への義理を欠くことは出来ないと上京した所、脳血栓を起こした。

※箱書「この帛紗はもと鉄斎翁と親しかった桑名鉄城翁の有であつたのを後に二条の香雪軒が譲り受けて持てゐたたま／＼私は香雪軒にこれがあるのを知り他日笹沼氏夫婦にこれを贈るために数年前に手に入れて今日を待つてゐたものである 昭和卅三年十一月廿八日 谷崎潤一郎記」。落款は「湘碧山房」（稲沢秀夫『秘本谷崎潤一郎』3-120）。

※この日は与野下落合で、家族だけの内輪の御祝い

12・4

をした。潤一郎・松子は出席する筈だったが、出来なくなった(1996/7/24笹沼千代子さん直話)。

笹沼宗一郎・千代子が福田屋に見舞いと祝品の御礼に来る。潤一郎は2、3日の内に熱海へ帰ると話す(『笹沼千代子日記』)。

3・22

◆昭和三十四年◆(1959)潤一郎74歳

2・14

帝国ホテルで笹沼源之助夫妻金婚式祝賀会。君島一郎・津島寿一・花岡芳夫らの祝辞・祝電があった(『撫山翁しのお草』高橋孝作「畏友故笹沼学兄を偲ぶ」)。

4・20

※『撫山翁しのお草』保坂幸治「大持ちにした蝙蝠傘」によれば潤一郎は欠席。

4・22

※『撫山翁しのお草』グラビア写真によれば、松子と重子は出席している。

※出席者200人。潤一郎欠席。松子・重子出席(『笹沼千代子日記』)。

3・16

潤一郎はこの頃、時々、日誌の事で笹沼千代子に電話する(『笹沼千代子日記』)。

※恐らく『高血圧症の思ひ出』(『週刊新潮』S34・

4・25

4・27(6・1)執筆のため。

潤一郎の日誌と笹沼千代子の日誌とを比較して調べるために、この日は何度も電話する(『笹沼千代子日記』)。

※恐らく『高血圧症の思ひ出』執筆のため。

潤一郎は、高木定五郎とその妻だった元芸者の園部さん(故人)の事を笹沼千代子に日記で調べて貰う(『笹沼千代子日記』)。

※恐らく『高血圧症の思ひ出』執筆のため。

「週刊新潮」に潤一郎の『高血圧症の思ひ出』掲載。潤一郎は笹沼千代子と電話で色々話す(『笹沼千代子日記』)。

潤一郎は笹沼千代子に電話する。体の具合が良くないので、計画中止(『笹沼千代子日記』)。

※24日に笹沼千代子たちが熱海に行く計画を中止したという意味らしい(1997/3/1笹沼千代子さん私信)。

潤一郎は笹沼千代子と日劇へ行く。春川ますみが出演(『笹沼千代子日記』)。

※3・21「内外タイムス」4面日劇ミュージックホー



ル広告によれば、《文豪谷崎潤一郎案 白日夢 第二部二十四景 第一部 白日夢 第二部 残酷物語 構成・演出丸尾長頭》ゲスト・スード、スードの女王春川ますみ、インテリ・スード、小川久美、ブロンド・スード、ピーチェス・ブラウンの写真入り。

※2・26「内外タイムス」3面に『白日夢』についての記事。『白日夢』と『白狐の湯』をテーマにしたもの。特に潤一郎の希望により、キャラクター・ダンサー谷内梨枝子と春川ますみが特別出演する。

同紙面に掲載された広告には《文豪谷崎潤一郎原案のスード・スベクタクル!!! 白日夢 日劇MH七周年豪華公演》とある。

※丸尾長頭『回想小林一三』によれば、『白狐の湯』は丸尾が翻案して脚本を書いたが、『白日夢』は潤一郎自身が書いた。

潤一郎は上洛（渡辺たをり『祖父 谷崎潤一郎』P139）  
・5月5日千萬子宛潤一郎葉書。

この日から（？）毎日京大病院に通院して、激重な検査を受けている。入院だが、夜は帰宅を許されて

5・19

6・22

6・23

6・26

7・8

いた（5月16日長尾伴七宛松子書簡）。

潤一郎は笹沼千代子に電話し、雑談をする（『笹沼千代子日記』）。

笹沼千代子が、潤一郎・松子の銀婚式の御祝品を持って、虎ノ門の福田屋へ御見舞いに来る（『笹沼千代子日記』）。

※潤一郎からは、銀婚式の記念品として、歌を染めた銀の鈴の風呂敷を贈った。歌は「えにしありてきみと浪速に相生の松も経にけり二十まり五とせ」（1997/2/27笹沼千代子さん私信）。

大映映画『鍵』封切り（橋弘一郎『谷崎潤一郎先生著書総目録』）。

笹沼千代子、映画『鍵』を見る（『笹沼千代子日記』）。

笹沼千代子が虎ノ門の福田屋へ潤一郎を見舞いに来る。「苦勞が多い、手の具合が良くないので病院通いをしている」と話す（『笹沼千代子日記』）。

※この頃、潤一郎は、『瘋癲老人日記』に出てくる頸を固定するコルセットやノブロン・ドルシン、鍼の治療などすべて実際に試してみた（伊吹和子『われよりほかに』512,3）。

7・19

笹沼源之助・喜代子・登代子が、熱海の谷崎宅を訪問。熱海に1泊（『笹沼千代子日記』）。

9・29

鷺尾丁未子が、お土産に加賀の「花びら寿司」を持って、久しぶりに笹沼千代子を訪ねる。話が弾んで、夕方6時過ぎに帰られる（『笹沼千代子日記』）。

10・17

午後、NHKから「ここに鐘がなる」出演の打ち合わせに来る（『笹沼千代子日記』）。

11・1

NHK出演に備えて、夕刻、松子・看護婦のみや子さん・ホームドクターの中沢先生と御手伝いさん1人を連れて、虎の門福田屋に赴き、1泊（伊吹和子『われよりほかに』6―7）。

11・2

潤一郎は午後6時までにNHKに入る。長田幹彦氏令嬢は笹沼千代子と同窓（『笹沼千代子日記』）。

※潤一郎は至急羽織袴一式を持ってくるよう、留守番の伊吹和子に電話するが、結局洋服で、夜、7時半から8時までNHKテレビ「ここに鐘は鳴る」第

10回に出演（伊吹和子『われよりほかに』6―8）。

※小学校での同級生長谷川良吉・杉浦貞二・峯岸鎮

治・笹沼源之助・小学校時代の恩師稲葉清吉の未亡

人千代・津島寿一・長田幹彦・京都万屋の金子竹次

11・4

郎・今東光・内田吐夢・紅沢洋子・岡田茉莉子・伊藤整・山中美智子・吉井勇が出演。

※笹沼千代子さんが付き添った。潤一郎は、出演前にドーランを塗って貰うのが好きだと言っていた

（1996/4/19笹沼千代子さん直話）。

※タクシードにも足りないほどの謝礼に潤一郎が激怒し、NHKが後で謝ったという（稲沢秀夫『秘本

谷崎潤一郎』3―121）。

※国鉄に対してもすごく怒った事もある。概して怒りっぱかった（1996/4/19笹沼千代子さん

直話）。

※潤一郎は東京に2泊して帰宅後、寝込んでしまっ

た（潤一郎『或る日の問答』）。

円地文子令嬢・素子と富家氏が帝国ホテルで結婚披露宴。出席者60名。笹沼源之助・喜代子・宗一郎・

千代子出席（『笹沼千代子日記』）。

※笹沼源之助と円地与四松とは大変親しく、金婚式

・藍綬褒章のパーティーにも出席。上田万年はお茶

の水女子師範で丸九治子の先生。富家氏は大学教授

で、笹沼千代子の娘・登喜子の夫・末野重穂とも親

しい。末野重穂の父・佛六は東京工大教授（1997/2/27 笹沼千代子さん私伝）。

12・25 笹沼源之助は、宗一郎の運転で聖路加病院へ。その足で、帝国ホテルの子供のクリスマスに出席。源之助はとても元気（『笹沼千代子日記』）。

3・2

※クリスマス頃、笹沼源之助は血便が出たため、聖路加病院で検査するも、原因不明。帝国ホテルで家族と愉快にクリスマスを楽しんだ（潤一郎『撫山翁しのぶ草』の巻尾に）。

◆昭和三十五年◆（1960）潤一郎75歳

2・25 笹沼源之助、聖路加病院で診察を受ける（『笹沼千代子日記』）。

4・1

3・1 朝、潤一郎はひどい頭痛に襲われ、昼前にホームドクターの中沢氏の診察を受けた後、全身に激しい痙攣が起こって意識を失った。この時の様子を看護婦のみや子さんが詳細に記録したものを、みや子さん自身が潤一郎の指示通りに書き改めて作文し、新仮名遣いの平仮名で書いたものを、そのまま『痙攣老人日記』の「佐々木看護婦看護記録抜粋」に使った（伊吹和子『われよりほかに』6-12、7-37）。

4・12

「朝日新聞」9面に潤一郎の病気が報じられ、御見舞いが殺到した。広津和郎も見舞いに訪れた（伊吹和子『われよりほかに』6-13）。

恵美子の結婚披露宴の招待状が刷り上がって届けられる。潤一郎は書斎へも歩いて行けるようになる（伊吹和子『われよりほかに』6-15）。この日、笹沼源之助・喜代子・登代子・喜美子が熱海へ潤一郎を見舞いに来る。源之助は、喉の異常についても話したが、さほど気にしていなかった（潤一郎『撫山翁しのぶ草』の巻尾に）。「笹沼千代子日記」。

この日、笹沼千代子は帝国ホテル・アーケードで、恵美子へのプレゼントとしてトルコ石とパール金台の指輪を注文する。千代子を持っているのが良いとの事だったので、同じデザイン・サイズにする（『笹沼千代子日記』）。

潤一郎のもとに香港の鮑耀明から胡桃が届く。早速、伊吹和子に礼状を書かせる。笹沼源之助と土門拳にも胡桃を御褒分けする。以後長く、胡桃を愛用する（伊吹和子『われよりほかに』6-15、16、17）。

笹沼千代子は、聖路加病院でレントゲンの結果を音

原先生から聞く(『笹沼千代子日記』)。

笹沼千代子・鹿島登代子・江藤喜美子は、9時の東京発で熱海へ。宗一郎・千代子はお祝いの指輪の目録、登代子・喜美子はティナーセット。日帰り。潤一郎は割合に元気(『笹沼千代子日記』)。

恵美子が親世栄夫と赤坂のホテル・ニュー・ジャパンで挙式・披露宴(潤一郎『台所太平記』)。

※笹沼源之助・喜代子・宗一郎・千代子・鹿島登代子夫妻・江藤喜美子夫妻が出席。親世栄夫と犬丸二郎は慶応幼稚舎から一緒だった。来客に津島寿一・東野英次郎・吉田健一ら(『笹沼千代子日記』)。

※潤一郎の健康を心配し、万全の準備をした。司会は川口松太郎と十返肇が交替で勤め、御祝儀として『細雪』の中から都一広(篠原治)が作曲した一中節「花の段」を都一中の三味線、川口秀子の立方で披露し、地唄の「寿」を四世井上八千代が舞った。その夜は、新夫婦・潤一郎・舟橋聖一ともにニュージャパンに泊(舟橋聖一『私の会ったひとへ83』谷崎潤一郎夫人(下)『S 39/8/1』朝日新聞)。

笹沼源之助は、咽喉に痛みを感じ、検査を受け、食

道橋と判明(潤一郎『撫山翁しのお草』の巻尾に)。

笹沼千代子さんによれば正確)。

潤一郎は松子と歌舞伎座雇の部で「伽羅先代萩」「六歌仙容彩」を見る。笹沼喜代子・千代子・鹿島登代子・江藤喜美子と一緒に、福田屋で夕食を共にする(『笹沼千代子日記』)。

※『松竹七十年史』によれば、5/3〜27。国際演劇月参加劇聖菊五郎祭。菊五郎劇団・海老蔵。「伽羅先代萩」は高尾丸より刃傷まで。

潤一郎は電話で千代子・喜美子を誘って、日劇のストリップ・ショーに行く。多喜万利がお気に入り。雨が降り出すが、ワシントンでビニールの靴が気に入る。買う。千代子・喜美子と福田屋へ行き、一緒に煮あづきを食べる(『笹沼千代子日記』)。

※「内外タイムス」によれば、5月12日初日、岡田忠吉構成・演出「街の噂・東京の下半身(内緒で覗きましよう)」。多喜万利のほか、美保みどり、浜みなど、リタ・エレン、パリのミュージックホールにも出演していたシャンソン歌手デデ・ドゥ・モンマルトルなどが出演。

笹沼千代子から福田屋に電話。潤一郎は昨日の感想を聞く(『笹沼千代子日記』)。

5・25  
笹沼千代子宛(代筆?) 潤一郎書簡612。ビニールの靴は工合がもう一つなので、なければ送らなくてよい。

※松子・重子へのお土産を買ったり、自分のネクタイ・セーター・靴を買ったりするのに、千代子らに相談した。ワシントンで売り出されたばかりのビニールの靴を買って、気に入っていた(1996/4/19 笹沼千代子さん直話。「銀座百点」S 61/12 座談会「文豪の隠れた素顔」で、松子も語っている)。

6・9  
永見寺で笹沼東五十回忌・登美子(源之助・三女)三十七回忌の法事。親類・倍楽園当時の人38人バスで与野に帰り、料理屋「山口」の出前。笹沼源之助手製の灰皿を引き出物に配る(『笹沼千代子日記』)。  
潤一郎は新宿第一劇場の昼の部の公演を見る(伊吹和子『われよりほかに』6-25)。

※『松竹七十年史』によれば、昼の部は「井筒業平河内通」「心中天網島」「権三と助十」。

※『瘋癲老人日記』によれば、お目当ての「河庄」

は午後2時開演、3時20分頃はぬる。『瘋癲老人日記』では、この後、伊勢丹に行き、6時から銀座の浜作に行くが、フィクションか。伊吹和子は『瘋癲老人日記』の通りとしているが……(伊吹和子『われよりほかに』6-25)。

※午後、潤一郎は松子・重子・恵美子と与野の笹沼邸を訪ねる。笹沼千代子から恵美子にトルコ石の指輪をプレゼントされる。6月9日の笹沼東五十回忌・登美子(源之助・三女)三十七回忌の法事の際に配られた笹沼源之助手製の灰皿も貰う。潤一郎だけを残して、他は早く帰る。潤一郎は上機嫌。江藤哲夫が出張のついでに、宗一郎の車で東京まで送ってくれる(『笹沼千代子日記』)。

※潤一郎『撫山翁しのお草』の巻尾に』に9月15日に松子・重子と沢村訥升の助六の揚巻を見るために新宿劇場の昼の部を覗きに行き、そこから自動車と与野の笹沼邸を訪問とあるが、月日は記憶違いであろう。『松竹七十年史』によれば、新宿第一劇場は7月22日を以て廃座されている。

※武智鉄二『歌舞伎俳優論 沢村訥升』S 51/3「演

7・25	この頃から、笹沼源之助は血便が出るなど具合が悪い(『笹沼千代子日記』)。 笹沼源之助、聖路加病院へ入院(『笹沼千代子日記』)。 笹沼千代子、三越へ行き、源之助の下着類を買う。 午後、講談社の記者が来て、潤一郎の話などいろいろ聞かれる(『笹沼千代子日記』)。 ※話の内容は千代子さんにも不明とのこと(1997/3/22 笹沼千代子さん私信)。 笹沼源之助は、千代子と一緒に車で聖路加病院へ行く。診察の間に菅原先生から細かい話を聞く。一時退院(『笹沼千代子日記』)。 夕方、急に江藤義成が訪問。喜美子と千代子でいろいろ話を聞く。疑わしい気もする。源之助は食事あまり摂れず、食道に引っかかり、飲み込むのが大変である(『笹沼千代子日記』)。 レントゲン治療に聖路加病院へ行く。痛みがあるの でお気の毒。昼食を風月堂で。源之助は割に元気だ	7・26	この頃、潤一郎は、武智鉄二に「訥升はいい、あの人のお蔭で歌舞伎は救われると思う」と言 った。 7・26	7・19	が食べられない(『笹沼千代子日記』)。潤一郎は、 鹿島登代子に電話し、笹沼源之助の検査の結果を尋 ねる(潤一郎『撫山翁しのお草』の巻尾に)。 笹沼源之助は、千代子と一緒に車で聖路加病院へレ ントゲン治療に行く(『笹沼千代子日記』)。鹿島登 代子が伊豆山に潤一郎を訪ね、笹沼源之助が癌であ る事を知らされる(潤一郎『撫山翁しのお草』の 巻尾に)。 午前中、聖路加病院。午後、講談社の人に来て、潤 一郎の話など聞いて行く(『笹沼千代子日記』)。 ※話の内容は千代子さんにも不明とのこと(1999 7/3/22 笹沼千代子さん私信)。 笹沼源之助、聖路加病院へ入院(『笹沼千代子日記』)。 食道鏡を入れたり、いろいろ検査の後、一応退院(『笹 沼千代子日記』)。 潤一郎は、一高時代の恩師・杉敏介の追悼文『敏介 とピン介』口述。この後、潤一郎は2、3日東京へ 行ったと伊吹和子は記憶する。これは、『瘋癲老人 日記』に出てくるキシロカイン注射を三宿の自衛隊 病院で受ける為だったが、この療法は失敗に終わった。
7・15	9・5	9・7	9・12	8・19	9・5

9・14

この上京中に笹沼源之助に会ったのが最後になる  
（伊吹和子『われよりほかに』6―37、41）。  
潤一郎は笹沼千代子に電話をし、明日、一寸見舞い  
に行くと言えり（『笹沼千代子日記』）。

9・15

午後、潤一郎は松子と与野に笹沼源之助を見舞う。  
2時間近く居て、浦和に鹿島登代子夫妻が新築した  
家を見に行き、掃宅した。源之助は菓を飲み過ぎて  
フラフラ（『笹沼千代子日記』）。

※潤一郎『撫山翁しのぶ草』の巻尾に』によれば、  
松子・重子と沢村訥升の助六の揚巻を見るために新  
宿劇場の昼の部を覗きに行き、そこから自動車で与  
野の笹沼邸を訪問したとあるが、存疑。源之助は、  
潤一郎が来る前に昼寝をして置こうとプロバリンを  
飲み過ぎ、少しぼんやりしていた。

『日本現代文学全集』第43巻「谷崎潤一郎集（一）」  
月報1号に笹沼源之助の「谷崎と偕楽園」掲載。  
午後、潤一郎が『三つの場合』『明さんの場合』43  
枚目口述筆記中に、小滝樫から電話。潤一郎は激怒  
し、「分かった、もう君には何も頼まないよっ！」  
と怒鳴って電話を切り、書齋を出て行った。某社か

10

10・12

ら出た日本文学全集の潤一郎の巻についての意見の  
違いが事の起こりだったという。潤一郎は、小滝樫  
とは今後一切の関係を断つと宣言し、嶋中鶴二社長  
にも伝えた。「明さんの場合」の口述は、以後2カ  
月ほど中断された（伊吹和子『われよりほかに』6  
―38）。

10・16

潤一郎は、便所で心筋梗塞の最初の発作に襲われる  
（伊吹和子『われよりほかに』6―38・潤一郎『撫  
山翁しのぶ草』の巻尾に『当世鹿もどき』『病床に  
て』）。

10・15

潤一郎は笹沼千代子に自宅から電話。軽い狭心症  
（『笹沼千代子日記』）。

10・17

午後、潤一郎は猛烈な発作に襲われる。上田英雄の  
指示で、以後10月一杯は自宅で臥床（潤一郎『当世  
鹿もどき』『病床にて』）。

※『瘋癲老人日記』勝海医師の病床日記抜粋で、老  
人が娘と論争した後、発作を起こすエピソードは、  
小滝樫との事件を転用したもの。勝海医師の病床日  
記は、担当医だった桜井忠司氏の日誌を借用して、  
ほぼその表現の通りになぞったもの。ユミさんが写

した(伊吹和子『われよりほかに』6-39, 7-37)。

※しかし、桜井忠司氏が「千葉市医師会だより」に執筆された文章によれば、昭和三十七年初春に松子と重子が医局に桜井忠司氏を訪ね、『瘋癲老人日記』末尾に医師の日記を書いて頂きたい、それも明日までにと依頼。『瘋癲老人日記』が掲載された前号までの「中央公論」を渡した。桜井忠司氏は午前一時までかかって原稿を書き上げた。翌日、桜井氏から原稿を受け取った谷崎は「これは面白い」と言ってみて一言一句変えず、そのまま使った。

※1998/10/25電話での桜井氏のお話では、病床日記はつけていたが、二三参照した程度で、一々確認はせず、短時間で記憶に従って「勝海医師病床日記抜粋」を書き上げた。天候については、桜井氏が適当にでっち上げたフィクション。谷崎からの指示はなかった(季節を合わせる程度)。

笹沼源之助、両国高校の創立60周年記念式典に出席して挨拶する。千代子も付き添う(『撫山翁しのお草』内山泰一「笹沼さん、母校へ最後の登校」)。

潤一郎は寝台自動車で東大上田(英雄)内科に入院

(潤一郎『当世鹿もどき』「病床にて」)。

※実際には舟橋聖一夫妻がお抱えの運転手を連れて、前夜から熱海のホテルに泊り、寝たままで行ける大型の自家用車で潤一郎を運び、舟橋夫妻は別の車で随行した(伊吹和子『われよりほかに』6-39)。

※同日、笹沼家にも知らされ、一同心配する(『笹沼千代子日記』)。

※上田内科、主治医は桜井忠司氏で、笹沼源之助の縁戚(潤一郎『撫山翁しのお草』の巻尾に)。

※桜井忠司氏は、昭和31年より45年秋まで東大病院第二内科に在籍。谷崎の退院後は銀座東急ホテル及び伊豆山の自宅に往診した。桜井氏の私信(1998/10/8笹沼千代子さん宛)によれば、谷崎は医師や看護婦の言うことをよく守り、柔和な学者という風貌だった。また、入院中、谷崎は聖路加病院に居る笹沼源之助を見舞うことを切望していたが、上田英雄教授に止められ、見舞いに行けなかった事を強く後悔していたと言う。

※潤一郎は、桜井忠司氏の長女の名付け親を依頼され、昭和三十五年十二月二十九日付けで命名書を書



いている。候補として初子・咲子・珊瑚・瑞穂・千尋を挙げている。桜井忠司・裕子夫妻は、長女に瑞穂、次女に千尋と名付けた。桜井夫妻と娘は、お礼に虎の門の福田屋に谷崎を訪ねた(1998/10/8、13笹沼千代子宛桜井忠司氏私信)

笹沼源之助は今日から再びレントゲン治療。あと1ヶ月もつかどうかという話になる。母上(喜代子)には病状その他は秘密にすることを、登代子・喜美子らと約束する(『笹沼千代子日記』)。

※この日、笹沼源之助は、聖路加病院で治療を受けた後、東大病院に潤一郎を見舞うつもりだったが、病院に到着後、癌のため気管に穴があき、そのまま入院する事になった。以後、胃に穴をあけて、腹部からゴム管でバルコ液を送り込んでいた(潤一郎『撫山翁しのお草』の巻尾に)。

※千代子・宗一郎は聖路加病院へ通院するついでに東大病院へ潤一郎を見舞いに行った。また、笹沼源之助の死が近付いた頃、千代子が電話で潤一郎に病状を話した(1998/10/18笹沼千代子さん私信)。

11・18

11・24

11・28

笹沼源之助、危篤。皆で病院に行く。宗一郎・千代子は帝國ホテルに泊まる。登代子は潤一郎を東大病院に訪ね、源之助の詳しい病状を話す。源之助、肺炎を起こす(『笹沼千代子日記』)。

夜12時40分、笹沼源之助死去、享年73歳。

※阪本小学校で同期だった平山謙氏から潤一郎に追悼録を作って貰いたいという手紙が来て、『撫山翁しのお草』を作る事になった(潤一郎『撫山翁しのお草』の巻尾に)・稲沢秀夫『秘本谷崎潤一郎』3-124)。

※この日付けで、勲六等瑞宝章受賞(『撫山翁しのお草』グラビア)。

※従六位(『撫山翁しのお草』吉野錦三「想ひ出の一節」)。

潤一郎は病院で寝たまま、伊吹和子に『吉井勇翁枕花』を口述する。この日の笹沼源之助の葬儀には出席できなかった(伊吹和子『われよりはかに』6-41)。

※潤一郎は電報を送った(1997/2/27笹沼千代子さん私信)。

12・7	鹿島登代子・江藤喜美子、東大病院に潤一郎を訪ねる(『笹沼千代子日記』)。「明さんの場合」口述再開(伊吹和子『われよりほかに』6-42)。	4・7	笹沼喜代子が、多分、福田屋へ、潤一郎と何かの打ち合わせに行っている(『笹沼千代子日記』)。
12・9	笹沼宗一郎・千代子、東大病院に潤一郎を見舞う。源之助の事等を話す。谷崎さんのお顔は見られない(『笹沼千代子日記』)。	4・14	笹沼喜代子と江藤喜美子が2人で熱海に潤一郎を訪ねた。日帰り(『笹沼千代子日記』)。
	※話をしたのは宗一郎。千代子は殆ど無言。潤一郎はつらくて声も出ない状態だった(1997/3/22 笹沼千代子さん私信)。	5・20	潤一郎は喜代子・千代子と永見寺に行く。「死に目に会えなくて」と涙ぐむ。余り多くは話さず。皆、沈んでいた。小川軒で昼食を共にし、福田屋へ。夕方近くまで話をする(『笹沼千代子日記』)。
	◆昭和三十六年◆(1961) 潤一郎76歳	6・17	歌舞伎座六代目菊五郎十三回忌追善興行に笹沼家の人々が行った。昼の部「根元草摺引」「傾城反魂香・吃又」「色彩間刈豆」「梅雨小袖昔八丈(髪結新三)」、夜の部「人待つ女」「追善口上」「鏡獅子」「盲長屋梅加賀齋」。潤一郎も行ったか?(『笹沼千代子日記』)。
3・23	佐藤千代・竹田鮎子、笹沼邸を訪問。笹沼源之助のこと、源之助と潤一郎の数々の面白い昔話など話は尽きず(『笹沼千代子日記』)。	8・9	潤一郎は『瘋癲老人日記』の口述開始(伊吹和子『われよりほかに』6-4)。
3・30	※千代子が嫁入りする以前の昔話が多く、残念ながら記憶なし(1997/3/22 笹沼千代子さん私信)。	9・25	※長男・浄吉の勤め先は、ライファン工業社長・笹沼宗一郎のアドバイス(伊吹和子『われよりほかに』7-25)。
	7時半に家を出て、笹沼喜代子・登代子・喜美子・千代子、谷崎宅へ。花びら寿司。神田。丁末子さん紹介の鮎。谷崎さん、とても哀えて、可哀想だ(『笹沼千代子日記』)。		潤一郎・松子と笹沼喜代子・宗一郎・千代子・登代

11・23

子・喜美子で、源之助の早めの一週忌を永見寺で。夕食は辻留で（『笹沼千代子日記』）。  
永見寺で笹沼源之助の一週忌。帝國ホテルで80名招待。津島寿一・君島一郎がスピーチ。犬丸徹三はハワイに居て欠席。潤一郎・松子ともに欠席（『笹沼千代子日記』）。  
※潤一郎は電報を送った。悲しくて、淋しくて、出席するのは辛いと言っていた（1997/2/27笹沼千代子さん私信）。

7・27

◆昭和三十七年◆（1962）潤一郎77歳

笹沼東一、麻布中学入学。登喜子、立教大学入学（1997/3/29笹沼千代子さん私信）。

7・28

笹沼喜代子、潤一郎を福田屋に訪ねる（『笹沼千代子日記』）。

7・28

笹沼喜代子宛潤一郎書簡638。約束の文字「喜」を送る。

※笹沼家で潤一郎の喜寿のお祝いのちゃんちゃんこの背中に染めるのに使ったもの（1998/9/15笹沼千代子さんとの電話）。

6・13

笹沼喜代子・登代子・喜美子・千代子、歌舞伎座昼

の部へ（『笹沼千代子日記』）。

※潤一郎の名前は無し。直前の6月4日か5日頃に、潤一郎は狭心症の発作と激しい目眩に襲われ、東大の医師に来診を求めた（野村尚吾宛代筆潤一郎書簡639）。従って、ひよっとすると一緒に行く約束になっていたかも知れないが、実際には行かなかったと思われる。

明日の潤一郎の喜寿のお祝いにちゃんちゃんこ（高島屋で作らせた）と特上の赤白ワインを用意する（『笹沼千代子日記』）。

※これらは翌日持参した（1997/5/11笹沼千代子さん私信）。

午後5時から市内富士屋ホテルで、潤一郎喜寿の賀宴が極内輪の人々だけで行なわれる。余興は、富山清琴夫妻の「都わすれの歌」と「茶音頭」、観世栄夫の仕舞「景清」、渡辺たをりの井上流京舞「松づくし」（潤一郎『台所太平記』）。

※「都わすれの歌」は潤一郎の『都わすれの記』から5首を選んで、富山清琴が作曲、潤一郎の喜寿の祝に初めて演奏したもの（松子「谷崎潤一郎と熱海

の鼎談」『餐』。

※笹沼宗一郎の撮影したこの時の記念写真あり。富山清琴夫妻・潤一郎・松子・渡辺たをり・笹沼喜代子・竹田有多子・鹿島次郎・小富美・観世恵美子・渡辺重子・鹿島登代子・江藤喜美子・竹田鮎子・竹田長男・渡辺清治・江藤哲夫・谷崎終平・観世栄夫・観世桂男・嶋中鵬二・高橋百々子・渡辺千萬子・笹沼千代子・嶋中雅子（新潮日本文学アルバムに掲載）。

※笹沼喜代子・宗一郎・千代子・鹿島夫妻・江藤夫妻で行く。台風7号の影響で雨。蒸し暑かった。帰りの汽車は、嶋中鵬二氏と一緒（『笹沼千代子日記』）。※日本料理だったが、評判は良くなかった。潤一郎も料理が良くなかったことを認めていた（1996/7/24笹沼千代子さん直話）。

笹沼喜代子が平山巖を訪ね、『撫山翁しのお草』への執筆を依頼。平山が潤一郎の単行本を全部蒐集していたことを聞かされ、潤一郎は感激する（潤一郎『撫山翁しのお草』の巻尾に『』）。

笹沼喜代子が福田屋の潤一郎を訪問。『撫山翁しのお草』

11・18

11・24

「お草」の為に久保田万太郎他数名が書いた原稿持参（『笹沼千代子日記』）。

※潤一郎は『撫山翁しのお草』の原稿は、柳行李に入れて、預り物だからと大切に保管していた（1996/4/19笹沼千代子さん直話）。

※この頃、笹沼宗一郎は潤一郎と度々電話で打ち合わせをして、文章を纏めていた。夜になると下書きで大変だった。久保田万太郎の赤坂辺りの自宅へ、笹沼喜代子が直接依頼に行った（1997/3/29笹沼千代子さん私信）。

潤一郎は、松子・重子・千萬子・笹沼千代子と新橋演舞場に『瘋癲老人日記』を見に行った。潤一郎は『瘋癲老人日記』のみで帰った（『笹沼千代子日記』）。※11・2発行の東京新橋演舞場「新派」に『今度は是非見に行く』掲載。2日から26日まで昼の部で『瘋癲老人日記』を花柳章太郎の督助、水谷八重子の颯子で上演した。潤一郎は、颯子の役は是非水谷八重子に、と駄々を捏ねたと言う（潤一郎『八重ちゃん』）。帝国ホテルで笹沼源之助三回忌法要（『撫山翁しのお草』花岡芳夫「無題」）。

— ※潤一郎・松子は欠席。

◆昭和三十八年◆(1963) 潤一郎78歳

2・4 鹿島登代子・江藤喜美子と喜代子とが、熱海の谷崎

宅を訪問(『笹沼千代子日記』)。

※笹沼千代子は行かなかった(1997/5/11笹

沼千代子さん私信)。

2・10 笹沼喜代子と千代子が、熱海の谷崎宅を訪問(『笹

沼千代子日記』)。

2・24 潤一郎が笹沼家に電話をする。『撫山翁しのお草』

の宗一郎の「序にかへて」について、最初に出た千

代子に、「あれ千代子さんが書いたのじゃないの？」

と訊くと、千代子は「それは宗一郎が気の毒で御座

います」と答えたので、潤一郎は大笑いした。すぐ

に宗一郎が電話に出たので、「とてもよく書いてあ

る」と褒める。また、「もっと後から想い出した事

があったら、書き足しても良い」と言った(『笹沼

千代子日記』)。

※笹沼宗一郎の原稿は千代子を書いたんじゃない

か、と潤一郎が言ったので、宗一郎が悔しかった。

嶋中鵬二からも褒められた(1996/4/19笹沼

千代子さん直話)。

※その後、末野悌六から原稿が来る。友人関係・会

社関係の原稿、殆ど集まる。末野悌六は、宗一郎の

東京工大の時の教授。後に末野先生の長男と、宗一

郎の娘・登喜子が結婚(1997/3/29笹沼千代

子さん私信)。

※末野先生・長野草風・萩原英一・花岡氏・高木氏

らは、借楽園の店ではなく、自宅の洋間によくやっ

て来た(1997/5/11笹沼千代子さん私信)。

潤一郎の原稿(潤一郎『撫山翁しのお草』の巻尾

に)52枚、笹沼家に届く。皆で拝見する(『笹沼千

代子日記』)。

潤一郎は熱海伊豆山の雪後庵を売却。秋に湯河原に

家を新築するまで約半年間、熱海市内西山町614故吉

川英治別荘を借りる。

笹沼喜代子と宗一郎が『撫山翁しのお草』の件で中

央公論社へ行く。係の世話役は、小倉遊亀令息。夕

方、久保田万太郎急死(『笹沼千代子日記』)。

※『撫山翁しのお草』は小倉遊亀の子息が担当で、

よくして頂いた(1996/4/19笹沼千代子さん

(直話)。

5・9 笹沼喜代子と千代子、久保田万太郎氏葬儀に築地本願寺へ行く。松子夫人にお会いする(『笹沼千代子日記』)。

5・12 午後、潤一郎の招待で、新橋演舞場の『台所太平記』・「多情多恨」を笹沼宗一郎・千代子・喜美子が見る。勘三郎がとても良かった(『笹沼千代子日記』)。

※『松竹七十年史』によれば、5月、新橋演舞場夜の部で『台所太平記』『追憶口上』『多情多恨』上演。喜多村縁郎追悼。新派に森雅之・中村勘三郎加入。

花柳草太郎・水谷八重子の夫婦に京塚昌子らの女中役。

5・20 『撫山翁しのお草』発行(印刷は15日)。編輯者・谷崎潤一郎、発行者・笹沼宗一郎、製作・中央公論社事業部。潤一郎は『撫山翁しのお草』の巻尾に『を寄稿』。

6・12 中央公論社から『撫山翁しのお草』800冊送った由(『笹沼千代子日記』)。

7・8 『撫山翁しのお草』に対して、皆様から続々お礼状が来る。中でも津島寿一氏の御礼状は、字はもとよ

夏

7・28

10・20  
11・7

り、文も素晴らしい。谷崎さんが、東一ちゃん、もう少し「しのお草」の題字を子供らしく書くと良かったと(『笹沼千代子日記』)。

潤一郎は、軽微な心臓発作で検査を兼ねて心臓研究所の付属病院に入院、1ヶ月以内で退院(松子『倚松庵の夢』『終焉のあとさき』)。

※潤一郎『越前竹人形』を読むによれば、10日はかり入院。

午後、笹沼宗一郎・千代子・東一が潤一郎を見舞いに訪れる。その後、3人はヒッチコックの「鳥」を見に行った(『笹沼千代子日記』及び1996/8/7、12千代子さん私信)。

日本生命日比谷ビル内日生劇場開場ベルリン・ドイツ・オペラ公演。フィッシャー・ディースカウラで「フィデリオ」など。潤一郎はこけら落としに招かれ、自分には一番合うと言っていた待望のワーグナーのオペラを見たが、この時は何時狭心症の発作が起ころか知れぬ状態だった。招待客はタキシードでなければならぬとの事で、急いで注文した(松子『湘竹居追想』)。

※谷崎夫妻が行ったのは10月20日の招待日と思われる。犬丸徹三夫妻もその日に招待された(1997/5/11笹沼千代子さん私信)。

潤一郎が笹沼家に電話。オペラとフィッシュヤー・デイスカウの切符が余っている。デイスカウは切符1枚6000円(『笹沼千代子日記』)。

※ドイツ・オペラの切符が余っていて、宗一郎・千代子を招こうとしたが、都合がつかなかった(1997/5/11笹沼千代子さん私信)。

日生劇場で、フィッシュヤー・デイスカウ独唱会。シユーベルトの「魔王」「さすらい人」「アヴェ・マリア」。どれも物凄く素晴らしい。笹沼宗一郎も千代子も大ファン。終わっても席を皆立たない。拍手鳴りやまず。帝国ホテルで食事(『笹沼千代子日記』)。

※この日は谷崎夫妻は来なかった(1997/5/11笹沼千代子さん私信)。

潤一郎は、観世栄夫・恵美子夫妻の住む、東京都文京区関口台町の目白台アパート6階に居住用と書斎用の2戸を借りて、湯河原の家が完成するまで仮寓(伊吹和子『われよりほかに』8-18)。

笹沼宗一郎・千代子・谷崎松子・重子と上野の文化会館でイタリア歌劇団を聞く。切符は1枚4000円、なかなか手に入りにくい。ロッシ二の「セビリアの理髪師」がとても素晴らしい(松子「谷崎の趣味」『谷崎潤一郎文庫』月報7・『笹沼千代子日記』)。

谷崎さんが目白台アパートにいらっしゃる(『笹沼千代子日記』)。

◆昭和三十九年◆(1964)潤一郎79歳

青山斎場で佐藤春夫葬儀。笹沼喜代子列席(『笹沼千代子日記』)。

潤一郎の招待で、「白日夢」試写会に笹沼喜代子・江藤喜美子・千代子出席(『笹沼千代子日記』)。

※3人とも、余り面白いとは思わなかった。喜代子が潤一郎に電話をかけたはず。潤一郎は武智鉄二の事は褒めもしなかったが、悪くも言っていない(1997/5/25笹沼千代子さん私信)。

※武智鉄二「なぜ私は『白日夢』をつくったか」(『三島由紀夫・死とその歌舞伎観』所収)によれば、潤一郎は試写を見て、少し長いと言った。

7・11	※稲沢秀夫『秘本谷崎潤一郎』5141によれば、潤一郎も見に行き、まあまあ <sup>254</sup> の出来と評価していたらしい。稲沢秀夫『聞書 谷崎潤一郎』 <sup>P254</sup> によれば、潤一郎は今度はカラーでやりたいと言っていた。	2・3
11・23	潤一郎は、湯河原町吉浜字蓬平1895の湘碧山房に移り住む(伊吹和子『われよりほかに』8121)。帝国ホテルで、笹沼宗一郎の娘・登喜子と末野重穂の結婚式。谷崎夫妻は欠席したが、登喜子の為に、新婚旅行のスーツケースを帝国ホテルの登喜子の部屋まで使いに届けさせた。登喜子はそれを持って、翌日、羽田から関西・小豆島へ新婚旅行に旅立った(『笹沼千代子日記』及び1997/5/11千代子さん私信)。	2・19
◆昭和四十年◆(1965)	潤一郎80歳	
1・5	湯河原へ、潤一郎をお見舞いに笹沼喜代子・登代子・喜美子の3人。潤一郎は東京医科歯科へ入院予定(『笹沼千代子日記』)。	3・2
1・8	朝、大型自動車に潤一郎を乗せ、松子・井出氏が同乗し、舟橋夫人は谷崎家の車に乗り替えて、お茶の水の東京医科歯科大学付属病院に向かい、入院する。	5・9
	気心の知れない医師や看護婦にカテーテルの出し入れをされるのが不愉快で、死にたい、死にたいと言いつ暮らしていた(潤一郎『七十九歳の春』)。	
	午後、笹沼千代子が潤一郎を見舞う。手術は明日。潤一郎はとても元気で、登喜子のこと(婚札など)を色々訊いた(『笹沼千代子日記』)。	
	※これ以前に、笹沼宗一郎も見舞いに行つて、結婚式の写真を届けていた(1996/8/7、12笹沼千代子さん私信)。	
	※潤一郎は入院中、結婚式の写真を病室で抱いて見ていた。新居を訪問すると言ったが止められた(1996/7/24笹沼千代子さん直話)。	
	ロクターリーの後、笹沼宗一郎が見舞いに来る(『笹沼千代子日記』)。	
	東京医科歯科の歯医者に通っていた笹沼喜代子が見舞いに来る(『笹沼千代子日記』及び1997/5/11千代子さん私信)。	
	五月晴。笹沼喜代子・江藤喜美子・笹沼千代子が千正屋のメロン(1300円)を持って潤一郎を見舞いに来る。千代子は4月にヨーロッパ・アメリカか	



ら帰国していたので、潤一郎は、ハワイの話を聞いて、自分も行きたいと言っていた(1996/8/7 笹沼千代子さん私信)。

※千代子は、3月28日から4月4日まで、ヨーロッパ・アメリカに旅行した。ハワイが暖かくて、御年輩のアメリカ人が多く、ローヤル・ハワイアン・ホテルのサーヴィスがよかった事を話した。泊まらずに与野に帰宅した(1996/8/12 笹沼千代子さん私信)。

※この時、松子が、潤一郎は登喜子の婚礼の写真(島田で朱のしぼりの振袖の写真)をよく眺めていたと話す(1997/4/7 笹沼千代子さん私信)。

笹沼喜代子と潤一郎と寄席に出掛ける(『笹沼千代子日記』)。

潤一郎が笹沼千代子に電話し、「末野重穂・登喜子夫妻にどこかで会いたい、今回はちゃんとした洋服も着物も持って来なかった、貴女はどんな服装にするつもりか」とホテルの場合を気にする。千代子は、「登喜子は妊娠中なので妊婦服しか着られませぬから、小父様も余り気になさらずに」と答える。

6・20

6・21

6月20日にホテル・オークラで会う事になる。メンパーは笹沼喜代子・宗一郎・千代子・末野重穂・登喜子・東一と潤一郎・松子の予定(『笹沼千代子日記』及び1997/5/11千代子さん私信)。

末野重穂から10時に笹沼千代子に電話。登喜子が右下腹部が痛むとのこと。皆と相談して、すぐ潤一郎にお断りの電話をする。とてもがっかりなされた(『笹沼千代子日記』)。

※末野重穂は、潤一郎と会う機会を得られずに終わり、今でも残念に思っている。宗一郎も、あの時オークラに行っていれば、皆でよい写真を撮れたのによく話していた(1997/6/20 笹沼千代子さん私信)。

※潤一郎は春早々から登喜子夫妻に是非会いたい、アパートへ行きたいと言っていた(1997/5/11 笹沼千代子さん私信)。

潤一郎が与野の笹沼家に見舞いの電話をした。千代子が出て、お詫びをし、潤一郎は「くれぐれもお大事に」と言った(『笹沼千代子日記』及び1997/5/11千代子さん私信)。

早朝、井出先生が谷崎宅へ往診。玄関まで送った直後の午前7時半、急性心臓衰弱のため、谷崎潤一郎死去（松子『倚松庵の夢』『湘碧山房夏あらし』）。

※潤一郎は、「豊田四郎監督・仲代達矢・岡田茉莉子・淡路恵子の映画「四谷怪談」を3回見て、訥升の芝居も見ても批評を書く。松山善三・高峰秀子夫妻に御馳走しよう。志賀直哉・安倍能成に会いに行こう。笹沼家の人達と、笹沼源之助の孫の登喜子夫妻を囲んで、ホテル・オークラで食事しよう」、などと楽しみにしていた（松子『倚松庵の夢』『湘碧山房夏あらし』）。

※朝、笹沼千代子が潤一郎に電話をした所、30分前に亡くなったとの事。びっくりする。すぐ、喜代子・登代子・喜美子、湯河原へ向かう。テレビ・ニュースでも大谷崎の死を報じている。3日程発熱、尿が急に出なくなり、心不全と言う（『笹沼千代子日記』）。※潤一郎が死んだ時、関西の漫才についてのメモが残されていた（1996/4/19 笹沼千代子さん直話）。

午後6時から8時まで虎の門の福田家を借切って谷

8・5

9・2

崎潤一郎通夜（31日「京都新聞」・伊吹和子『われよりほかに』8-29）。富山清琴の「残月」演奏（渡辺たをり『花は桜、魚は鯛』<sup>P233</sup>）。夜、新坂町の観世の家にお骨と位牌を安置する。孫の桂男4歳、柏2歳が松子を慰める（松子『倚松庵の夢』『湘碧山房夏あらし』）。

※笹沼家からは、喜代子・宗一郎・登代子・喜美子がお通夜に行った（1997/5/11 笹沼千代子さん私信）。

午後6時、虎の門福田家で谷崎潤一郎初七日の供養が営まれ、観世鏡之丞・栄夫によって謡曲「隅田川」が霊前に手向けられた（橋弘一郎『谷崎潤一郎先生著書総目録』）。笹沼喜代子・登代子・宗一郎・喜美子列席（『笹沼千代子日記』）。

午後3時、上野寛永寺で谷崎潤一郎五七日忌と七七日忌の法要が営まれ、富山清琴の地唄「残月」、井上八千代の京舞「花散里」（「ほととぎす」）が霊前に手向けられた（橋弘一郎『谷崎潤一郎先生著書総目録』・玉上琢磨『「谷崎源氏」をめぐる思い出』（中）「大谷女子大國文」第17号）。笹沼千代子出席。参

— 会者300人位。辻留のお弁当（『笹沼千代子日記』）。

◆昭和四十五年◆（1970）

11・17

「中央公論」刊行10000号記念と吉野賞・谷崎賞（第6回）贈呈祝賀を兼ねたパーティーが帝国ホテルで開催される。この時の谷崎賞受賞作は、埴谷雄高の『闇のなかの黒い馬』と吉行淳之介の『暗室』。この日、三島由紀夫は松子夫人に、『金色の死』を全集で解説したことを、「先生がお嫌いだっただ作品を解説させていただきまして・・・」と鄭重に挨拶したと伝えられる。

※松子・千萬子・鮎子・笹沼喜代子・宗一郎・千代子も出席。三島由紀夫が松子のマフラー・コートを受け取り、椅子を勧めた。11月25日の三島自決の翌26日、鮎子と松子から千代子に電話があった（『笹沼千代子日記』）。

◆昭和五十二年◆（1977）

9・25 一 笹沼喜代子死去。

◆昭和五十四年◆（1979）

5・30

『谷崎潤一郎の書』刊行。笹沼宗一郎の協力なしには出来得なかつた（松子による同書あとがき）。

◆昭和六十二年◆（1987）

5・30

帝国ホテル牡丹の間にて12時から谷崎潤一郎二十三回忌。ドナルド・キーン・サイデンステッカー・水上勉・淡路恵子・鹿島登代子・江藤喜美子・笹沼東一らの写っている笹沼宗一郎撮影の写真あり（1997/6/1 笹沼千代子さん私信・雨宮庸蔵『偲ぶ草』）。

◆平成元年◆（1989）

4・21 一 笹沼宗一郎死去。

◆平成三年◆（1991）

3・27 一 鹿島登代子死去。

(付録)

年譜に入れられなかった笹沼千代子さんの話の一端を、以下に簡条書きにして置く。

- ・渡辺重子さんは、潤一郎のお金なども管理していたと思う。
- ・潤一郎は帝国ホテルによく泊って、大丸徹三を大丸君と呼んでいた。
- ・千代子は日記を付けていたので、潤一郎はよく電話で、こないだの歌舞伎とか東踊りの演目は何だった、などと聞いた。
- ・笹沼家の人の潤一郎宛の手紙は、すべて千代子の代筆。
- ・潤一郎から、宛名や住所は崩すもんじゃないよ、楷書で書くんだよ、と教えられた。また、嘘字を書かないように、辞書を引くように言われた。
- ・潤一郎は笹沼家の、男性よりも女性と話す事を好んだ。潤一郎の話題は、歌舞伎・洋服・着物の話が多かった。
- ・潤一郎は洋服に非常に興味を持っていた。
- ・戦後、笹沼家では借菜園の支那料理を手料理で食べさせ、潤一郎は大変喜んだ。その写真あり。
- ・潤一郎は喜代子には一目置いていた。喜代子は歌舞伎に非常に詳しく、誰それの演じ方だから、誰それはやらないなど)ので、潤一郎は歌舞伎については、喜代子に教える請う事もあった。
- ・潤一郎は京都の悪口を随分言っていた。
- ・潤一郎は吉野の桜はいいと繰り返し言っていた。
- ・潤一郎は千代子に平安神宮の鈴のお雛様を勧めた。
- ・潤一郎はシモーヌ・シモンが好きだった。
- ・潤一郎は井上愛子(現・四代目八千代)・富山清琴が大好きだった。
- ・潤一郎は笹沼宗一郎の撮った写真が気に入っていた(昭和24年の坊主頭の写真が特に気に入っていた)。土門拳の写真は気に入らなかった。
- ・潤一郎は、自分はまだまだ書くものがあると言っていた。しかし、文学の話、作家の批評は殆ど言わなかった。